

NO. 42 1999. 11

(株)九州地域計画研究所

もくじ

NETWORK

- お年寄りと一緒に、日韓の史跡探訪ツアーに参加して考えた  
～対馬海峡を挟んで文禄・慶長の役の城を尋ねた …… 2
- 2010～15年の風景Ⅲ  
当たる予測、当たらぬ予想  
～推し測れることは当たりやすいが思うことは当たりにくい～ …… 6
- クラインガルテンの先駆けの村：群馬県倉瀬村  
～その取り組み経緯と新規就農者移住の条件は～ …… 9
- 子どもが大人の参加をリードする  
～イギリスGW体験視察～ …… 12

見・聞・食

- いま田舎は、まちの情報をこんなに仕入れている①  
～第59回地域ゼミから …… 15
- いま田舎は、まちの情報をこんなに仕入れている②  
～個人農家が主催する水車小屋祭りに300人が集まった …… 17
- ISO14001を取得するとは？ …… 18
- 竹富島紀行  
～文化遺産・生活空間・観光資源という  
3つの顔を持つ南の小さな島～ …… 20

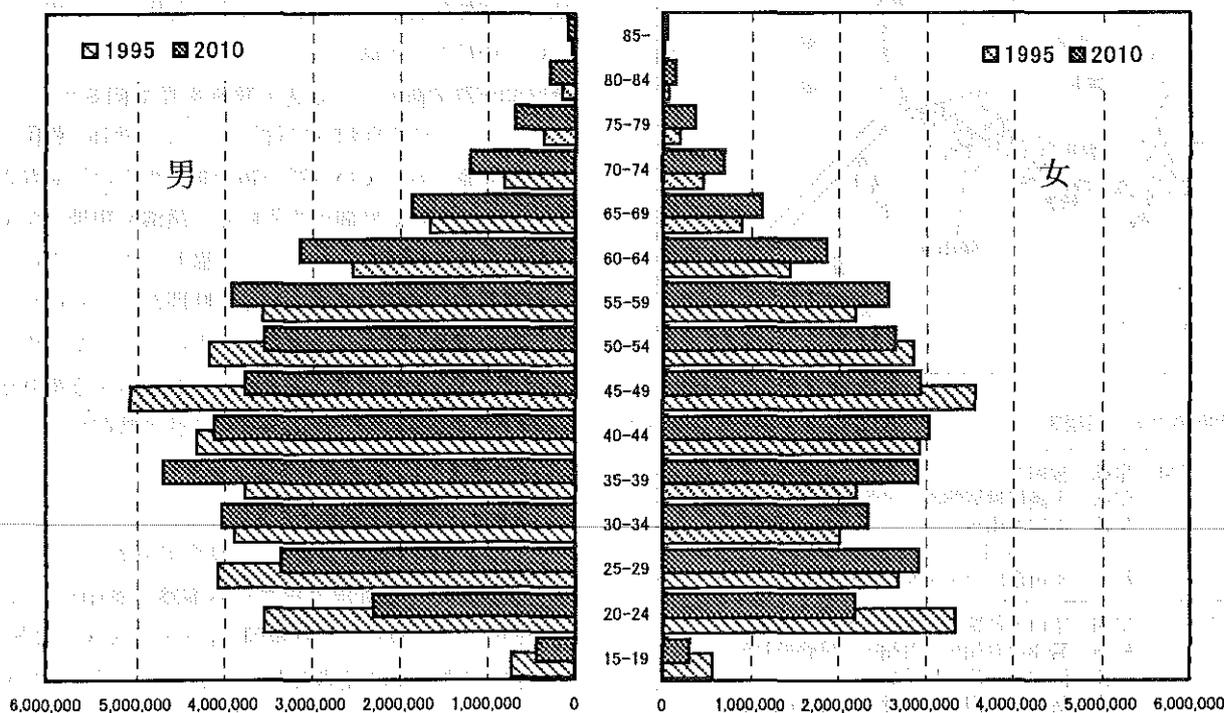
近況

- モズが枯れ木で……、マッカッカッカーソラノクモ …… 23
- 今年の農業報告 …… 23
- 近頃の運動会の風景 …… 24

本・BOOKS

- 建物のリサイクル (学芸出版社 青木 茂著) …… 24

就業者が減少する時代になる ～一方で人口は増える～



上の人口ピラミッドのグラフは、全国の年齢5歳階級別就業人口の2010年の予測値である。1995年と比較すると、総人口は約200百万人増加するが、就業人口は55万人の減少という推計結果になった。この大きな要因は、ベビーブーマー（昭和25～29年生まれ）が、1995年45～49歳から15年後60～64歳となり、退職の時期を迎え、860万人から500万人へ減少することによる。これを補う第2世代1995年の20～24歳代は、全体で990万人いるが、就業人口は2010年760万人で、第1世代よりもかなり少ない。この少子化傾向は第1世代以降ずっと続いているため、次の時代の豊かさをどうやって産み出すか考えなければならない。(P7の表参照)

# お年寄りと一緒に、日韓の史跡探訪ツアーに参加して考えた

～対馬海峡を挟んで文禄・慶長の役の城を尋ねた

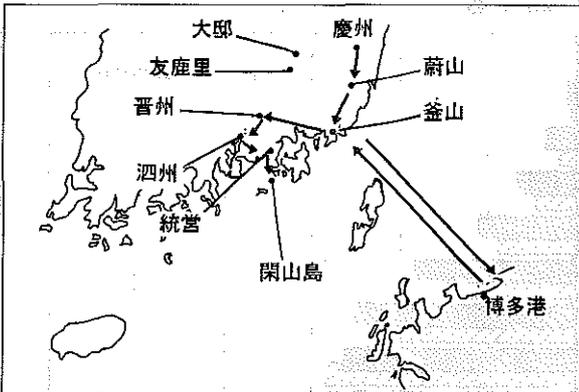
尾崎 正利

豊臣秀吉が朝鮮半島に侵攻したとき、日本の武将が現地に数多くの出城を築いたが、「倭城」と呼ばれるそれらの城のうち29の城はいまなお往事の石垣の姿をとどめているという。今年5月からJR九州と韓国旅行公社の共同企画で「文禄・慶長の役」史跡探訪ツアーという旅行が数回開催されて評判になっていた。

こういう特殊なテーマのツアーで海外にまで行くというのは一体どんな人たちなのか。また見に行くという倭城はどんな状態で遺っているのか。野次馬根性半分で9月8～11日に3泊4日でこのツアーに参加してみた。

●参加者は全国から。テーマ型ツアーに人が集まる  
9月8日出発が最終ツアーだったことも関係している

ツアー行程図



今回のツアー行程表

1日目	早朝	福岡発
	午前	名護屋城博物館・名護屋城跡
	午後	海路釜山へ (ジェットフォイルで3時間弱)
	泊	釜山市内のホテル(黄正徳先生の講演)
2日目	早朝	釜山の倭城(釜山镇支城跡)見学
	午前	晋州の晋州城と晋州国立博物館見学
	午後	泗川の船津里城跡見学
	夕方	統営の忠烈祠(李舜臣將軍の祠)見学
	泊	統営のホテル(統営伝統の戦勝舞観覧)
3日目	朝	船で閑山島の李舜臣將軍の本営探訪
	午後	大邱の友鹿里で沙也可14代目、金在徳氏を探訪(講演)
	泊	慶州のホテル
4日目	午前	蔚山の西生浦城へ登る
	午後	釜山市内観光のち海路博多へ

かもしれないが、今回のツアーは「大団体」であった。福岡44名、唐津3名、長崎33名、宮崎26名の延べ106名の参加者である。これが4台のバスに分乗していく。

出発前に集合場所(JR博多駅筑紫口)にいくと60～70代とみえるご年輩ばかりだ。7～8割までいる模様。ご夫婦での参加も多いとみえる。歴史・考古ファンが勢揃いしているのでは、と予想していたが少し違った。

後で分かったのだが、福岡組44名のうち、県内からの参加は少数で、遠くは山形、東京、埼玉、千葉、神奈川から、近くは鹿児島、熊本などと全国各地からの参加である。県外から多くは飛行機や鉄道で福岡までわざわざやってきて、このツアーに参加している。

やはり、このツアーのテーマ性が人を集める魅力を持つのだろうか。そうだとすれば同じ関心をもつ赤の他人が突然集合して100名も大挙、外国にまで出かけていくのはスゴイ話だ。

●時間が許す限り、とことん現地を見て回るツアー  
このツアーの3泊4日の行程をみても、普通、韓国ツアーの定番になっている買い物や食べ歩きの予定などは入っていない。時間が許す限り、講演や現地見学でナマの史跡を理解していくことに徹したツアーということらしい。韓国入りした後は、時間がもったいないから朝の道路混雑だけは避けようということ、ガイドさんから、朝の時間くれぐれも注意するよう繰り返し呼びかけがあった。各ホテルでの朝の時間は

モーニングコール 6時15分

朝食 7時～7時半

出発 7時40分 といった具合である。

●名護屋城で予備知識を得てから海路、釜山に  
今回のツアーはいきなり韓国に行くのではなく、最初、佐賀県鎮西町にある名護屋城跡・名護屋城博物館に立ち寄っていく。ここで「文禄・慶長の役」と「倭城」についての予備知識を得て、釜山に向けて海路出発する。結局、この予備知識は後々まで役に立つことになる。韓国に渡って先方のガイドさんの説明と照らし合わせて、頭の中を整理できて理解しやすかったからだ。

名護屋城博物館では学芸員の宮武さんによるダイジ

ェスト解説があったが、印象に残ったものとして、覚えている感じであげてみる。

- ・豊臣秀吉公は貿易を通じて海外情勢に通じており、明の国力低下に乘じ、大陸での発言権を得る機会とみていた。全国統一の前に“唐入り”を宣言した。
- ・はじめ朝鮮国には“明をとるから道を開ける”と命令。古来、儒教的国家観から明とのつながりが深い朝鮮はこれを拒否。日本側の侵攻が始まった（文禄の役1592～96年）。
- ・休戦講話の後に再び再発した慶長の役（1597～1598年）は期間こそ短いが、日本側の狙いが当初の入唐でなく最低でも朝鮮半島を獲ることになったため、戦闘と破壊、殺戮は凄惨なものになった。
- ・名護屋城は主に九州の大名に命じて約5ヶ月で完成した朝鮮侵攻の前進基地であり、日本の威勢を広告する場でもあるため、絢爛豪華な城であった。
- ・名護屋城は織豊時代に築城されて現存する城跡としては、安土城と並んで国内随一の史跡価値をもつ。
- ・朝鮮半島に残された倭城跡は、その石組みからは日本の城の姿もうかがえる。保存状態からいえば価値のある歴史的遺産といえる。

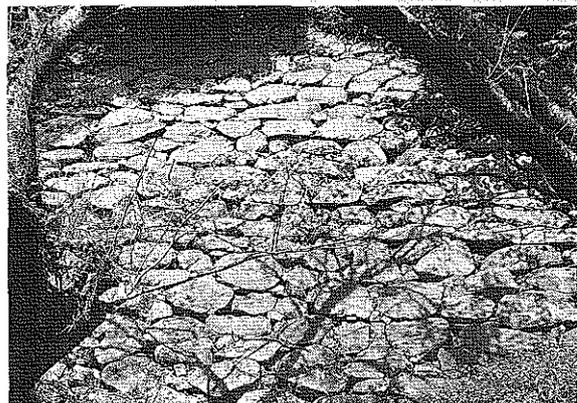
●釜山・晋州・泗川の戦跡めぐり。そこは歴史の証人として今も息づいている。

文禄の役（朝鮮では壬辰倭乱という）で侵攻した日本軍は約16万人。慶長の役（同じく丁酉再乱）では約14万人。人口約500万人であった朝鮮国にとっては大軍である。当時、日本は世界中で最も多く鉄砲を保有した国の一つであり、兵器の差は歴然としていた。加えて100年近くの内戦が続いた日本の武将達は戦争に練達している。文禄の役では釜山上陸から僅か20日でソウルまで侵攻した。

釜山に渡って迎えたツアー2日目、私たちは釜山鎮支城（プサン・チンジソン）と晋州の晋州城（チンジュソン）を訪れた。

釜山鎮支城は、朝鮮の城を攻め落としたあと日本軍が倭城を築いたものだが、現在は、釜山の中心街近くの小高い丘・子城台公園の中にある。朝8時、我々ツアーの日本人が倭城を求めて丘を歩いて上がっていく。丘の上には早朝バドミントンを楽しむ主婦のグループなどが汗を流しており平和な公園そのものであった。それでも丘の中腹には累々と石組みが残っていて、小西行長が命じて再整備させたという雰囲気はある。

一方、晋州城は城そのものが史跡公園として整備され、公園内に壬辰倭乱・丁酉再乱に関する資料を展示した国立博物館が設置されている。この城は兵3千5百万人、住民約6万人が立て籠もり、ついには全滅したことで知られる。“倭城”という中世日本の侵略の象徴であり、韓国国内でもこれを貴重な史跡としてどう後世に伝えるべきか今なお緒論ある。現在、韓国内の倭



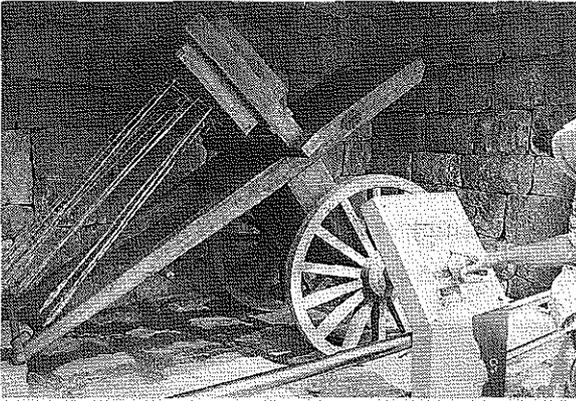
【名護屋城の石垣】

築城には西国の様々な大名が参加した。割った石を積んで構造・美観ともに優れた箇所、大小の石をただ積んだだけの箇所など、石積み技術の上手・下手の差が現れている。



【釜山鎮支城の石垣】

山城の石組みで小西軍が築いたといわれる。



【晋州城国立博物館の展示品】  
木製で矢を連射する車で、こうした武器で日本軍に立ち向かっていた。

城跡は公園として再整備されたところが多い。この晋州城は純粋に朝鮮式城として復元され、民族の誇りと歴史を伝える貴重な史跡となっている。今では南江のほとりにたたずむ晋州城の美しい風景を背景に、新婚カップルが仲良く写真を撮る姿もあって、市民の憩いの場にもなっている。

ツアー参加者の中にはどこで手に入れてきたのか、倭城の石垣の見取り図を日本から持ってきた年輩の男性2人連れがあって、見取り図と実物が合っていることを確認しあっては2人で喜んでいる。聞いてみると怡土城（前原市）の研究者であった。

●統営で李舜臣將軍の祠を探訪。

晋州城のあと、韓国の南部沿岸の近い鎮海湾に面した港町・統営に向かった。統営には李舜臣將軍を祀った忠烈祠（チュンヨルサ）がある。私がまだ小学生の時、社会科の授業で先生が、中世の朝鮮侵攻のことに時間を割き、自分の亀甲船の木製模型を持参して教室に据え（今にしてみるとスゴイと思う）、熱心に説明された光景を覚えている。そのとき李舜臣將軍という名を聞いて、大変頭脳明晰な優れた軍師で、日本の水軍を叩いた人だということを聞いた。

今ではソウルや釜山を始め、韓国の各地にその像が建てられているが、実は戦前の一時期、日本の軍人の間でも大変尊敬された英雄でもあった。ガイドさんによると「江田島の海軍兵学校の卒業旅行では統営の忠烈祠に参ることが一つの流行ようになっていた」という。明治時代、日本海軍は日本海海戦でロシアの艦隊を破ったが、出撃直前に日本の水雷船隊の司令官が李舜臣將軍の祠に必勝祈願したという話が残っており、それがきっかけではないかという説明がなされた。ツ



【西生浦城を目指して】  
首にタオル、肌着姿で山のぼり。この頃までは皆さん元気でした。

ア一同行者の中に当時の江田島を知る方がいないか聞いたが、残念ながらいなかった。

私たちが夕方近くに訪れた統営の忠烈祠は人影もなく静かで、そこには李舜臣肖像画、明の皇帝からの恩賜の八品などが展示されている。私の周りでは「やさしそうなおじさんね」とか「うちのお父さんに似ているわね」などとツアー参加の年輩の女性達がヒソヒソと軽口を交わしている。肖像画に描かれた正装の李將軍はそれほど温和な雰囲気の方だった。

●山に登って倭城を見よう。西生浦城跡の探訪。

最後に訪れた倭城は、ツアー最終日に探訪した蔚山郊外の西生浦城（ソセンボソン）である。この城は海岸に近く、高さ200Mの小高い山全体を城内とした作りで、加藤清正が築城したものだ。

我々はこちらを見るために山登りせねばならない。この日はとびきり早く起こされたのだが、朝9時前から山登りである。60～70代の年輩を中心とする約100名の山登りだから大変である。一同「キツイなあ」「足が重いなあ」と悲鳴を上げながら喜んで登っていく。

登ること30分、山頂に達した。城の本丸の石垣がそのままの姿で残っているのには驚いた。周りの皆さんも目を丸くしている。精巧に組まれた石は全て他の場所から運び上げたものだという。ここの石組みは熊本城を思わせる武者返しも立派なもので、やはり加藤清正がつくった城という雰囲気を十分にもっていた。山頂に30分ほどたたずんだ後、私たちは城を降りた。

●4日間、お年寄りに囲まれて考えた

このツアーでは私はバスの中で重宝された。重い荷物を運んであげたり、写真を撮ってあげたり、配布資料の細かい字を読んであげると大変喜ばれる。お菓子

や果物、ビールなどの差し入れも沢山いただいた。期せずしてたくさんのご年輩の方と一緒に過ごしたのだが、ツアー旅行に参加する高齢者を見ていて気づいた点がいくつかあったのでまとめてみた。

①行動をとともにした人は皆「仲間」にしてしまう。旅が終わったあとの住所交換など、後々つながる人ネットワーク情報は旅行会社から提供されても良いように思う。自家製の漬け物を送る約束を交わしている人もいた。

②知らない人と一緒に過ごすことに順応性がある。山形から一人で参加していた最年長の男性は、あえて知らない人と一緒に旅ばかり選んでいるという。

③話をよく聞き、勉強熱心で、行動もスピーディー。着替え、食事、買い物、トイレ、移動ははつきりいつて今の若い人よりも迅速かもしれない。

④へんな無駄遣いはしない。物欲はあまりないのではないか。むしろ話とか景色とかを楽しむに来ている。

⑤食欲は旺盛である。高速道路のPAで休憩する度に何か買い食いし、その上3度の食事は皆さん全て食べていた。若い人よりよく食べる。

⑥結構目が肥えている。今時の高齢者は国内外の旅行経験をかなり持っているだろう。行く先々の料理、ホテル、ガイドなどに対して評価の目は厳しい。

⑦旅行後半にはどうしても体力的にしんどい。腰の痛みやシビレを訴える人も出てきた。私も最終日の山登りでは私も後押しして手伝ったが、そうしたサポートも必要になっていくと思う。

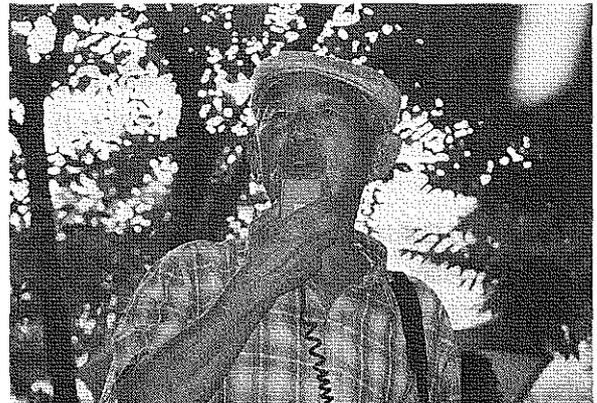
●テーマに載せて楽しく史跡を見せて回る。これは立派な地域づくりの商品だ。

西生浦城を最後に日程は終了したが、山登りを終えて周りの参加者の顔を見ると、一様に満足という感じだった。普通、これだけ大人数だと途中文句も出がらだが、それもなかった。私なりにいくつかその理由を考えてみた。

①歴史や史跡などに少々関心のある人であれば、大抵理解できるツアー内容だった。単なる名所めぐりでもなく、歴史マニア向けでもないところが良かった。

②テーマ型の旅行の醍醐味があった。ガイドブックになくや一人旅でも来ることがない特定の都市や農村に行くことができた。

③史跡探訪ツアーにふさわしい現地ガイドの活躍があった。会話しながら理解を助ける教養の蓄積がガイ



【大邸郊外の農村・友鹿里にて沙也可14代・金 在徳さん】  
朝鮮侵攻に参戦したが朝鮮側に部下を率いて投降した日本の武将（沙也可（さやか）氏の14代目の子孫。司馬遼太郎さんの「街道をゆく」にも登場。「日韓交流は今の子供達の世代に受け継ぐべきだ」と語った。

ドさんに備わっていた。とくに宋良順さんという方は、戦前、日本の女学校に学んであったとかで、日本人の視点も併せた歴史のスケール感を感じさせる説明をされたように思う。

④料理・宿泊施設が良かった。一通り韓国に来たという雰囲気は味わえる食事・施設内容があった。

⑤内容の密度の濃さに比べ値段は圧倒的に安かった。

今後、地域の歴史・文化資源をテーマとする旅行商品は国内でももっと増えるかもしれないと思うが、これを実現するには結局、来た人に情報を正確に体系立ててサポートしてあげる人の素養、あるいは史跡や文化自然の保存状態など、地域社会が地域の人や歴史などの資源を大切にしていることが重要に思える。

そして始めに名護屋城博物館に寄ったことが、その後のツアーを引き締めているような気がする。

後日、JR九州でこのツアーに企画段階から加わっておられた広瀬課長（船舶事業部）にお聞きすると「この発端は、秀吉公の子孫と李舜臣將軍の子孫が、名護屋城跡にある茶室で献茶会をもったことをきっかけに、韓国旅行公社の福岡事務所長さんがこの企画をJR九州にもちかけたのが始まりです」という。

やはり、人に来ていただく地域の魅力づくりは、ベースとなる地域間の人の関わりがものをいうということに改めて実感した次第である。

（おざき まさとし）

## 当たる予測、当たらぬ予想

— 推し測れることは当たりやすいが思うことは当たりにくい —

糸乗 貞喜

●「21世紀の日本はどうなるのですか」と中国人の学生から問いかけられた

久留米大学で「個族化社会を迎えた現在の日本と一人っ子社会の中国」について話して討論した。その時、中国の女子大生から問いかけられたのが表記の問題である。

私は、個族化社会は、高学歴化や人間の生産費（1人前までの養育費）が高くなっていることと相俟って、少子化ともかかわりあいながら一層進むと考えている。したがって、少子化後20年たった時代2010～15頃は、家族の形態は、今とはかなりちがったものとなると思う。「このことは、儒教社会の中国や韓国では、一層問題が大きくなるのではないか」ということが、当日の私の主張であった。

「では、どうしたらいいのですか」とその女学生にいきがられていたら、通訳をしてくれていた中国人男子大学院生から「カンニングの話をしたらどうですか」と言われた。カンニングというのは、通訳をしてくれる人のために、あらかじめ渡しておいた文章の中に書かれていた話で、「自分の知りたい時に知りたいことを教えてくれる友人・知人のネットワークを日頃から自分の努力で構築しておく」ということであった。

これでオチがつくのかなと思っていたら、「日本人の学生は勉強もしていないし、そんな努力をしているようにも見えない。こんなことで21世紀の日本はどうなるのですか」と聞かれたわけである。

私はこう答えた。①文化や科学技術などの学問をすれば、それによって生産力が高まり、次の時代には、“物的に”豊かになるという命題は世界中で認められているように思う。②日本人は、そういう努力を50年間続けて来た。※③人口の年齢構成の上でも、努力をする人＝働く人の比率が高く、効果も出やすかったので、急速に“物的に”豊かになった。④今後について見ると、この仕組みが続くと“物的な豊かさ”は一層強まるが、この仕組みが逆になると“物的に”貧困になりはじめると思う。⑤今の少子化・個族化の状況は、仕組みが変わってしまっていることを示している。したがって

貧困化すると思うが、それは「一人ひとりが貧困になる」という形ではなく、「人口が相当に減る」とか「ツケを次世代に廻す」とかいう形をとったりすると思う、と答えた。いずれが起こるのか、どれも起こるのかはよくわからない。

※詳しく述べると、江戸時代の300年間に、読み・書・ソロバン及び勤勉とか約束を守るなどのレベルでの、文化的知的基盤の構築をすませ、明治維新後から敗戦後の50年にかけて、近代科学技術を身につける努力を続けてきた。

そういう意味で言うと、“貧困化”はバブルの頃から始まっている。ありもしない需要をデッチあげて土地コロガンでツケ廻しをし、お金儲け（モノもうけ）に狂奔したのは、「文化、科学技術などの学問をすること」とはおよそかけはなれたことであった。またその後、景気対策とか言って赤字国債を大量発行して、次の世代にツケまわしをしている。こんな問題を担ぎながら、人口も増やし、一人ひとりも豊かになるということが、できるようには思えない。

●働く人の数は増えるのか、減るのか

この15年間（1980→1995年）は、就業者数は大幅に増えた。男では11.2%、女では21.0%も増えている。そして男女合計の1995年の就業者数は6414万人で、総人口の半分（51.1%）でもある。この15年間の増加数は男女合わせて833万人にもなっている。

就業者の比率で見ると、総人口に対して、男性は79.8%から75.2%へ減っているが、女性は46.0%から47.3%へ増えている。

この間の特徴をまとめると、①就業者は大幅に増えて、稼ぐ人が多くなった。つまり家族でみても、働く人の数が多いと豊かになりやすいと言えるように、国でも豊かになりやすかったのである。②増えたのは男が388万人、女が455万人で、女性の方が多い。③一方、就業率では若い人と男性高齢者の就業率が下がって、中高年女性の就業率が上がっている。④したがって1980→95年は、豊かさの元となる就業者が大幅に増えたが、今後はどうだろうか。

● 2010年の就業者数は減っている

今後のことを考えてみたい。

2010年の就業者数がどうなるかについて、単純ではあるが、1980年から95年にかけて変化した動きが、今後15年についても同じように起こるものとして考えてみる。過去15年の変化をもう一度まとめると、①各年令別人口が変わった（これは厚生省の人口問題研究所

の推計値で対応）、②各年令ごとの就業率は若い人と男性の高年齢層は低くなり、③女性の中・高年齢層は高くなっている。厚生省の人口推計をベースにして、就業率の変化については過去15年の推計が今後15年続くものとして推計を行う。

この結果が表1である。

これによると、男性全体の就業率が4.6%、女性全体

表1：全国の年齢5歳階級別人口と就業人口の推計

昭和55年 1980

	男			女			合計		
	人口	就業人口	比率	人口	就業人口	比率	人口	就業人口	比率
総人口	57,593,769	34,647,358	60.2	59,466,627	21,163,951	35.6	117,060,396	55,811,309	47.7
15-19	4,223,685	787,479	18.6	4,048,560	726,343	17.9	8,272,245	1,513,822	18.3
20-24	3,960,116	2,843,050	71.8	3,880,910	2,660,129	68.5	7,841,026	5,503,179	70.2
25-29	4,545,468	4,318,363	95.0	4,495,887	2,150,938	47.8	9,041,355	6,469,301	71.6
30-34	5,421,545	5,234,572	96.6	5,350,186	2,432,919	45.5	10,771,731	7,667,491	71.2
35-39	4,594,716	4,460,718	97.1	4,606,865	2,523,008	54.8	9,201,581	6,983,726	75.9
40-44	4,158,990	4,029,788	96.9	4,178,510	2,555,343	61.2	8,337,500	6,585,131	79.0
45-49	4,033,146	3,883,226	96.3	4,057,241	2,500,766	61.6	8,090,387	6,383,992	78.9
50-54	3,546,963	3,383,452	95.4	3,653,059	2,121,961	58.1	7,200,022	5,505,413	76.5
55-59	2,511,379	2,259,950	90.0	3,102,126	1,547,823	49.9	5,613,505	3,807,773	67.8
60-64	1,945,930	1,468,541	75.5	2,519,317	963,708	38.3	4,465,247	2,432,249	54.5
65-69	1,743,659	1,073,380	61.6	2,221,022	585,347	26.4	3,964,681	1,658,727	41.8
70-74	1,317,661	572,399	43.4	1,705,316	261,528	15.3	3,022,977	833,927	27.6
75-79	848,714	242,209	28.5	1,187,971	98,311	8.3	2,036,685	340,520	16.7
80-84	417,715	73,303	17.5	675,928	28,726	4.2	1,093,643	102,029	9.3
85-	171,959	16,928	9.8	357,411	7,101	2.0	529,370	24,029	4.5

平成7年 1995

	男			女			合計		
	人口	就業人口	比率	人口	就業人口	比率	人口	就業人口	比率
総人口	61,574,398	38,528,962	62.6	63,995,848	25,612,582	40.0	125,570,246	64,141,544	51.1
15-19	4,385,775	712,731	16.3	4,172,183	581,576	13.9	8,557,958	1,294,307	15.1
20-24	5,041,228	3,538,619	70.2	4,853,773	3,351,600	69.1	9,895,001	6,888,219	69.6
25-29	4,452,125	4,064,564	91.3	4,336,016	2,695,529	62.2	8,788,141	6,760,093	76.9
30-34	4,113,848	3,875,039	94.2	4,012,606	2,034,804	50.7	8,126,455	5,909,843	72.7
35-39	3,945,809	3,754,885	95.2	3,876,412	2,228,413	57.5	7,822,221	5,983,298	76.5
40-44	4,527,352	4,302,075	95.0	4,478,720	2,946,903	65.8	9,006,072	7,248,978	80.5
45-49	5,328,335	5,054,674	94.9	5,290,031	3,579,254	67.7	10,618,366	8,633,328	81.3
50-54	4,421,787	4,169,692	94.3	4,500,131	2,867,719	63.7	8,921,918	7,037,411	78.9
55-59	3,906,621	3,556,729	91.0	4,046,859	2,204,823	54.5	7,953,480	5,761,552	72.4
60-64	3,611,948	2,525,320	69.9	3,863,161	1,453,371	37.6	7,475,109	3,978,691	53.2
65-69	2,998,706	1,643,535	54.8	3,397,372	905,771	26.7	6,396,078	2,549,306	39.9
70-74	1,941,558	792,775	40.8	2,753,609	472,812	17.2	4,695,167	1,265,587	27.0
75-79	1,260,411	350,424	27.8	2,028,656	195,885	9.7	3,289,067	546,309	16.6
80-84	824,492	146,053	17.7	1,476,273	72,738	4.9	2,300,765	218,791	9.5
85-	479,086	44,447	9.3	1,100,659	21,384	1.9	1,579,745	65,831	4.2
増加数	3,980,629	3,881,604		4,529,221	4,448,631		8,509,850	8,330,235	

平成22年 2010

	男			女			合計		
	推計人口	就業人口	比率	推計人口	就業人口	比率	人口	就業人口	比率
総人口	62,272,000	37,313,000	59.9	65,351,000	26,281,000	40.2	127,623,000	63,594,000	49.8
15-19	3,064,000	434,000	14.2	2,917,000	316,000	10.8	5,981,000	750,000	12.5
20-24	3,343,000	2,292,000	68.6	3,180,000	2,212,000	69.6	6,523,000	4,504,000	69.0
25-29	3,819,000	3,350,000	87.7	3,635,000	2,936,000	80.8	7,454,000	6,286,000	84.3
30-34	4,374,000	4,020,000	91.9	4,159,000	2,352,000	56.6	8,533,000	6,372,000	74.7
35-39	5,026,000	4,688,000	93.3	4,850,000	2,927,000	60.3	9,876,000	7,615,000	77.1
40-44	4,408,000	4,108,000	93.2	4,322,000	3,060,000	70.8	8,730,000	7,168,000	82.1
45-49	4,026,000	3,762,000	93.4	3,976,000	2,953,000	74.3	8,002,000	6,715,000	83.9
50-54	3,796,000	3,539,000	93.2	3,806,000	2,661,000	69.9	7,602,000	6,200,000	81.6
55-59	4,247,000	3,912,000	92.1	4,344,000	2,584,000	59.5	8,591,000	6,496,000	75.6
60-64	4,829,000	3,128,000	64.8	5,067,000	1,875,000	37.0	9,896,000	5,003,000	50.6
65-69	3,792,000	1,850,000	48.8	4,226,000	1,140,000	27.0	8,018,000	2,990,000	37.3
70-74	3,088,000	1,185,000	38.4	3,672,000	706,000	19.2	6,760,000	1,891,000	28.0
75-79	2,485,000	673,000	27.1	3,269,000	368,000	11.3	5,754,000	1,041,000	18.1
80-84	1,611,000	288,000	17.9	2,497,000	143,000	5.7	4,108,000	431,000	10.5
85-	964,000	84,000	8.7	2,527,000	48,000	1.9	3,491,000	132,000	3.8
増加数	697,602	-1,215,962		1,355,152	668,418		2,052,754	-547,544	

増加数： 総人口、就業人口の各年間の増加数

就業率推計  $95\text{就業率} \times 95\text{就業率} = 2010\text{就業率}$

80就業率

推計人口： 国立社会保障・人口問題研究所による将来推計人口（平成9年）

就業人口： 年齢別人口×就業率

の就業率が0.7%下がることになっている。就業者の実数では、男は122万人減、女は67万人増となることが予測される。合計では89万人の減となる。

ここでもうひとつ至極単純な仮説をたててみたい。つまり「家族（地域）の面倒を見る就業よりも、外での稼ぎが多い人の割合が高いほど豊かになる」という命題である。一方、地域サポート産業（面倒をみる人）の比率は全国的にも人口に対して一定となっている。とすれば、地域差は外から稼ぐ人の数できまることになる。人口が増えながら就業者の減る世の中になるという体験は、日本初のことではないかと思う。

※サポート産業については「よかネットNO37. 1999. 1」のセダン型新産業分類で述べている。おおまかな趣旨は、①フロント型産業＝地域の次の産業を先導する産業、②モノづくり型産業＝地域の現在の富をつくっている産業、③生活サポート型産業＝地域の暮らしを支える産業で、これが充実していると住みやすいというもの、と分けると、①と②は大都市が多く、③は全国ほぼ一定となっている。また①から③までの全体の就業者数についても、大都市地域と地方の県では1割以上の差がある。大都市は将来の産業づくりと現在の富ともに有利になっている。

このことが、21世紀には、物的な貧困化が起こるといふ根拠である。

●単純に組み立てて、推測した仮説は当たりやすい

私は30年余り、予測と計画の仕事をしてきたが、大当たりしたものと、分かりきっているようでかなりはずれていることがある。前者は基本的な動きをおさえて推し測ってみることであり、当たらなかった後者は予め想ってみることである。

最近、松浦市の地域づくりにかかわらせていただいているが、そこで人口ピラミッド図を見て、昔行った人口予測が極めてよく当たっていたことを思い出した(図表2)。

これによると、ベビーブーム世代の親と、その子の人口が最も少なくなっている。生まれたのは当然のことながらベビーブーム世代が最も多かったのだが、戦後の高度成長期に一齐に大都市へ出ていったので、それより生まれてくる数が少なかった世代の人口より減ってしまったのである。

これと同じことを30年前の隠岐で発見した。それ以後、地方の各地で同じことを見いだしたので、「2000年

には大都市で親の世代と子供の世代で就職戦争が起こる」という論文を1975年頃に書いたことがある。これは極めてよく当たった予測であった。

この論文の意味は、一旦生活の場や仕事の場を都市に決めてしまうと、その仕事が故郷にない人は帰れないということを主題にしている。

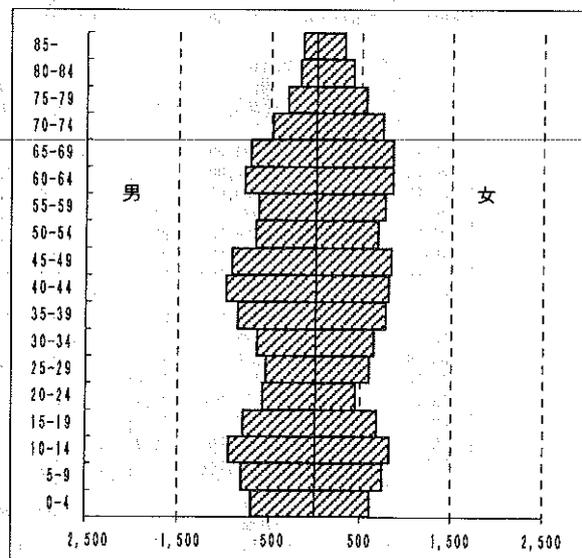
その後の働きを見ても、Uターンしているのは仕事があり、家がある人がほとんどである。

※最近「就農者が大幅に増加」という新聞記事がよく出るようになった。それを見て、本当に就農者が増えているように思っている人もいるが、現実には今でも離農の方がはるかに多い。新聞は「犬が人に咬みついても記事にはしないが、人が犬を咬むとニュースにする」と云われている。都市の人が農村で働くようになるということは、農地や家や農業機具、技術などからみて「人間が犬を咬むくらい珍しいこと」と見られているのである。

このことから見ても、家の手当、働き場としての工場などの建設、道路建設など地域の基盤となるものは10～15年程度では変わらない。それに付随する人口も急には変わらない。つまり、急変がないのだから予測しやすい。

それに対して人間の気分はなかなか読みにくい。詳しく書かないが、一言だけふれると、私は40年前くらいに就職したが、その頃には自分が外国旅行するなどと思っていなかった。20年前には外国に行くときは餞別をもらったり、出発の前に壮行式のようなことを

図表2：松浦市の人口推移（1995）



ゆったりしていた。最近では、仲間と海外に行くときでも「〇日〇時に国際線カウンターのあたりに集まりましょう」というメッセージがフレックスで入るだけとなっている。

また、これほど食べ物が氾濫し、贅沢になるとは、20年前には思わなかった。40年前には日本人は食うに困っていたのである。

それはともかく、「人口は増加するが就業者は減る」ということは外れないと思っている。

●中国の1人っ子政策の将来は

先日、韓国全羅南道木浦市の「木浦共生園」というところを訪れた。ここは日本人の田内千鶴子さんが韓国人のキリスト教伝道師と一緒に戦前から始めた施設で、朝鮮動乱で夫が行方不明になった後も続け、「韓国孤児の母」と呼ばれた。今はその孫にあたる方で、若い美人の田内緑さん（20代後半の美しい女性）が園長で、その人から説明を聞いた。その話は割愛するとして、その中の一部にふれたい。

この入所児童数は130人だが、その内訳は表3の通りで、不思議なことに男がはるかに多い。私の質問は「高校生以上が半分もいるのですか」というものだったが、「日本でもでしょうか、韓国は儒教の影響もあって身寄りのない人が入学や就職が難しいのです」。そして私の不審顔を察したかのように、「男女差も不思議でしょう。韓国は不自然な理由で男の出生の方がずっと多いのですよ」といわれた。

中国は「1人っ子政策」がとられ出してから今年で20年になる。私のはじめて中国へ行ったのは16年前で、「1人っ子政策」4年目であった。その頃はまだ小学校にも行っていなかったの、学校の送迎を親が毎日するなどということは予想もしなかった。

2010年には現在の1人っ子の半分は20~30才となる。2020年には今の1人っ子は20~40才になり中堅層となる。このことは必然的に就業者数減をもたらす。その上、男女の比率が極めて大きいという問題もある。その頃の「思い」はどう変化するのかわからないが、

表3：木浦共生園の児童現況

	未就学	小学校	中学校	高校	大学	計
男	11	20	16	28	6	81
女	5	5	10	22	7	49
計	14	25	26	50	13	130

の元（就業者）は確実に減るのである。

今や中国だけではなく、日本も1人っ子社会になっているともいえる（生涯出生児数が1.5人を割っている）。韓国も少子化している。その上、韓国も中国と同じように儒教の影響で男女の出生差が大きい。中国の食糧問題を含めて、アジアの北東は将来どうなるのだろうか。

●よくなることもある。物的豊かさのみ求めるのであれば…

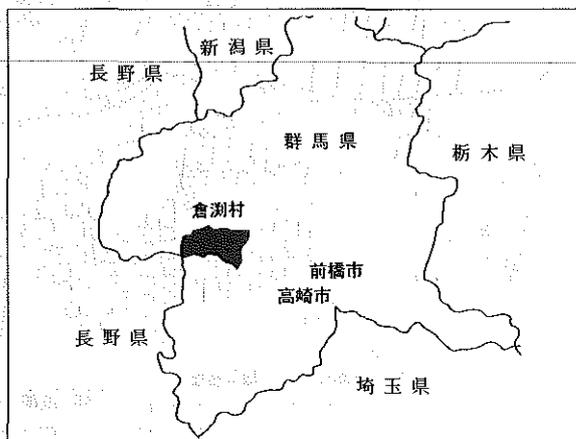
衛星通信、光ファイバー網が2010年には全国的にネットワークされることになっている。モノの消費をして、せっせとゴミの生産に勤めるのではなく、人づきあいの中で豊かな気分を味わうようにすることになるのだろうか…。

（いとりの さだよし）

クラインガルテンの先駆けの村：群馬県倉淵村  
 ~その取り組み経緯と新規就農者移住の条件は~  
 山田 龍雄

現在、福岡県岡垣町のまちづくり計画のお手伝いをしており、たまたま町内のある人とまちづくりのことをいろいろと話していたときに、倉淵村という名前を初めて聞いた。その人の話では、この村では都市住民に農園づくりをきめ細かくサービスしているらしいという漠然とした内容であったが、何かしらしばらく気になっていた地域のひとつであった。そこで東京へ出張の折に、日程を1日延ばし、この倉淵村へ行ってみた。

倉淵村の位置



●きっかけは、倉渕でクライナガルテンをやりたいという人の強い思いから

倉渕村は群馬県の北西部に位置し、長野県の軽井沢町に接する山村であり、東京から車で2時間～2時間半を要するところである。

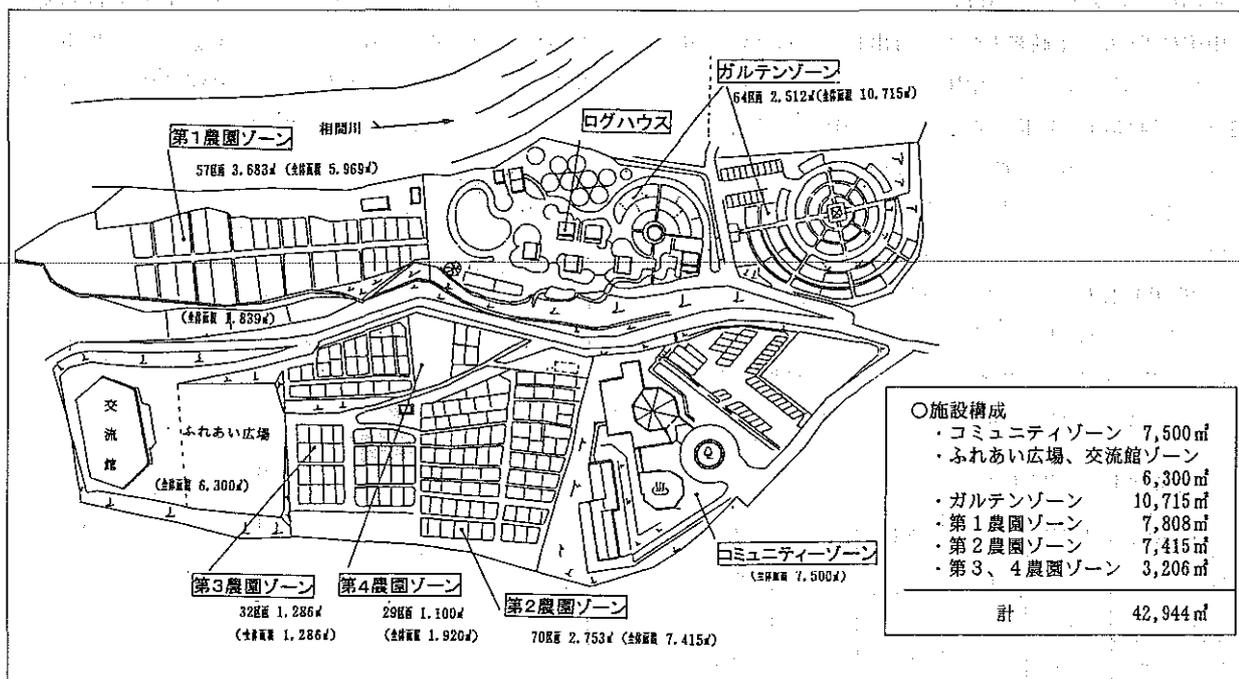
この村はクライナガルテンの先駆けの村であり、農民でない一般の人が一定規模の農地を借りて農業ができるという法律である「特定農地貸付けに関する農地法等の特例に関する法律」をつくる基となったところでもある。このクライナガルテンに取り組むようになったきっかけと経緯についての概略をまとめたのが右表である。当初のきっかけが農文協の雑誌に詳しく掲載されており、これから少し引用させてもらおうと『ドイツ暮らしの経験のある商社マンの近藤さんという方が、ご自身の長男が精神障害を持っていることもあって、クライナガルテンという場が子供や老人、あるいは障害のある人たちにとって「共生社会の推進」に大きな役割を果たしていることに共鳴したそうである。そこで、「園芸療法」としての「花の輪を広げる運動」を進めるため一家を挙げて花卉栽培を始め、近藤さんはこの運動を広げるための場を群馬県中を探し歩いて、ついに見つけたのが倉渕村であった。』と記載されている。昭和63年に、近藤さんのクライナガルテンの構想を村が理解し、事業化へと動きだしたとのことである。

●温泉施設をつくり、赤字経営を解消

これまで私は、いくつかの市民農園を視察したことがあるが、安い賃貸料経営であり、ほとんどのところが赤字であったようだ。倉渕村のクライナガルテンも平成3年にオープンしたが、平成7年度までは赤字経営であった。そこで平成8年に既存施設の農業体験実習館「ふれあい館」に温泉を引き、浴室を増築したことにより「ふれあい館利用者」は前年の8千人から8倍の約6万4千人になり、平成8年度には1,300万円、平成9年度には2,200万円の黒字転換となっている。

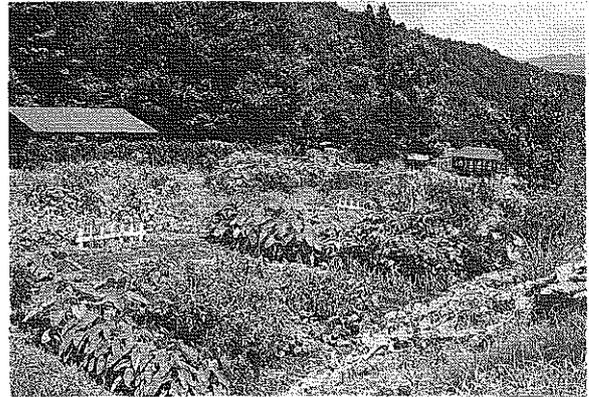
当初の管理運営は村直営で行っていたが、温泉を引いて黒字転換となった翌年の平成9年に第3セクター（村、農協、森林組合、村内関係金融機関の共同出資で村が82%出資）を設立し、施設の運営管理を委託している格好となっている。従って、当初は「花と緑の手づくり村」のシンボルとして、都市住民への農業の場提供と村民との交流がコンセプトであったようだが、現在は、温泉休養と市民農園という2つのコンセプトの併設型となっている。ちなみに平成9年度の売上は1億7,200万円で、うち75%にあたる1億3,000万円が温泉の利用料と宿泊施設である。クライナガルテン全体面積の25%しか占めていない「ふれあい館」の方で売上の8割を占めていることになる。

温泉を引いたことに対して、今回、説明していただいた担当者の方は「温泉を引いて黒字になったことは



取り組みの経緯

- S63年4月 「日本型クラインガルテン実現化をめざして」をテーマに倉洲村シンポジウム開催
- S63年11月 倉洲村クラインガルテンの推進を基軸とした緑の手づくり村基本構想書の策定
- H元年11月 クライガルテン用地の確保（特定農地貸付法による、購入2/3、賃貸1/3）
- H2年3月 新農業構造改善事業（自然活用型）によりログハウス5棟完成
- H3年3月 県単独ふれあい農園推進事業によりログハウス周辺の農園整備、ログハウス1棟完成
- H3年5月 農業農村活性化農業構造改善事業（緑の空間型）計画地区の指定
- H3年6月 クラインガルテン一部オープン
- H3年11月 農林漁業体験実習館建設工事着手
- H4年3月 県単独ふれあい村整備事業により体験農園ゾーン38区画完成
- H4年5月 第1農園ゾーン55区画完成
- H4年10月 農林漁業体験実習館オープン（ふれあい館）
- H6年3月 ふれあい広場施設完成
- H7年4月 農園252区画となる
- H8年5月 「ふれあい館」へ相間川温泉を引湯し、温泉施設のオープン
- H9年6月 第3セクター「相間川温泉株式会社」設立



農園ゾーン1の風景



当初、指導者用の部屋としていたが、不定期に来るお客さんに対応できず、今は農機具置き場となっている

良いことであったが、農業を目的に来る人からは、これまで自由に利用できた休憩室や研修室が利用しづらくなったことには不満のようである」とのことであった。しかし、第3セクターであるにしる赤字経営を続けることは村民の税金をつぎこむことになるため、黒字にする事の方が優先だと考えられる。農業目的で来る方には、別途、簡易な休憩施設をつくる方が良いだろうと思う。

●農園利用熱心度比率は、1(週1回):6(月1~2回):3(放置)か

担当者の方に農園利用者の訪問頻度を聞いてみると、年間に30日~40日来ているような熱心な人は4~5人程度で平均では月1回程度ではないかと言われた。

また、現地を歩いてみて全く利用していない農地も3~4割(まだ借りられていない70区画含む)あるように感じられた。以前、福岡都市圏の市民農園でも放置されている農地が3割程度ということを知ったことがある。そこで、利用者122人の方から、その利用熱心度比率を大まかに出してみたのがこの項のタイトルなのである。毎週1回程度は正確には4%程度しかないが、ここでは1割程度としている。

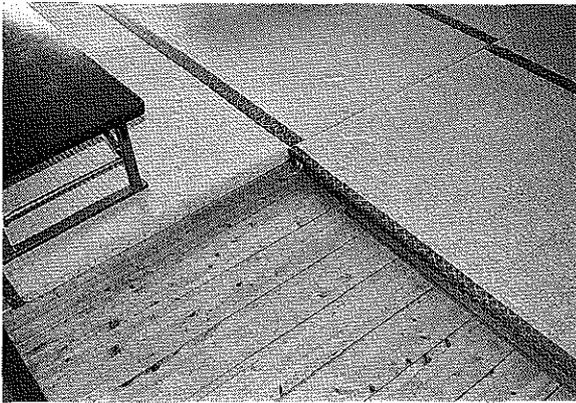
やはり農地が遠隔地にあると月1~2日が平均的となり、管理者のフォローも大変なことであろうと想像される。ちなみに利用者の居住地は東京都31人、埼玉県

28人、神奈川県9人、千葉県4人、県内5人となっており、かなり遠隔地から来ているようである。

●新規就農者が定着していくためには受け皿のシステムが必要

倉洲村がクラインガルテンに取り組んだ効果としては、まず都会より劣っているという意識から、すばらしい自然があり、都市の方がわざわざ村に来てくれるという住民の素直な驚きとともに、「花と緑の手づくり村」というキャッチフレーズのもとに住民の意識が徐々に変わってきていることが大きいとのことであった。また、クラインガルテンの村というイメージ効果のため、新規就農者が平成4年度以降10組あった。(このうち8組が有機農業グループからお世話になる)

なぜ新規就農者が10組も転入したのかを聞いてみると「この村では有機農業に取り組んでいるグループが2つあり、この有機農業の人が新規就農者にまず自分の農地を貸すなり、あるいは斡旋し、実際に農業研修をやって支援していくという体制ができています。そして希望者はその有機農業グループに参加し、農業で生計



温泉利用者のため、板の間の研修室に急きょ畳を引いた部屋

子どもが大人の参加をリードする

—イギリスGW体験視察—

伊藤 聡

子どもたち25人を連れてイギリスのグラウンドワークトラスト（以下GWT）を見に行く。この企画を聞いたときには冗談だと思ったのだが、夏休み最後の一週間を使って本当に行くことになった。保護者、先生、県会議員、GW福岡のメンバーを含め、総勢54名の大ツアーが組まれた。子どもたちは宮田町のGWジュニア（宮田西中学校の1年生）の25名である。

私はイギリスGWTに行くのはこれで3回目になるが、今回は子どもたち中心でいろんな体験をさせてくれるということで、単なる会議や視察でないところが新鮮だった。

GWTはイギリスで1980年代サッチャー政権下の小さな政府構想の中で生まれ、住民・行政・企業のパートナーシップの元に環境改善、環境教育、環境マネジメントを行っていかうとするトラストである。環境マネジメントとは、保護や保全だけでなく地域にとってどうであるかを総合的に捉えていくこと、あるいは環境を生かして地域産業を育てていくこと（例えば自然体験型の観光地にするなど）である。有名なナショナルトラストの方は、自然や歴史遺産を保全していくことに主眼が置かれているが、GWTは荒廃地などに積極的に手を加えていかうとするところに目的の違いがある。

イギリスでも旧産炭地に当たり、地域の再生を図っている南ウェールズの3つのトラストを1日ずつ訪問したので、順に話を進めたい。

を立てることができるようである」とのこと。つまり、新規就農者を増やしていくためには、かけ声や経済的な支援だけでなく、実際に農業を伝授し、見守ってやれる人や体制があるかどうかのかがキーポイントのようである。

やはり、賃貸料を高く設定できない市民農園のみではなかなか収支を合わせるの難しいようで、施設の魅力づくりとともに何か収益が得られる施設（農産物販売所、温泉施設等）との併設型とする必要があるようだ。（やまだ たつお）

●炭鉱跡の谷全体を公園化

—マーサー&ロンダ・カノン・タフGWT—

イギリス国内に42のトラストがある中で、最も大きいトラストのひとつである。このトラストについては詳しい資料があるので少し紹介すると、専任スタッフは現在30人、年間事業費は約4億8千万円（約260万ポンド）である。基本的には環境改善活動などの事業を通じての収入が主だが、政府や自治体からの活動助成金もある。活動助成はトラスト設立当初が50%で、その後年々減額され、トラストごとに自立が求められる。ここのトラストでは現在15%になっている。地域人口（マーサー・ティドフィル市とロンダ・カノン・タフ市）は約30万人である。

トラストの役割は、自治体や住民の発案、あるいはトラスト自らの提案により、荒れ地の公園化などの環境改善プロジェクトを企画し、その企画に見合った協力者をパートナーとして集め、資金面ではスポンサーや補助金、寄附などを集めてくることである。トラストはそれだけの信用とネットワークを地域に持っていることが必要になる。トラスト内部にもデザイナーや造園家など技術を持つ専門スタッフを抱えており、事業を進めやすい。

マーサー&ロンダ・カノン・タフGWTではトラストが整備し、管理しているコミュニティーパークでの自然体験を行った。池を中心とする公園で、子どもたちは魚釣り、植物採集、水辺の生き物観察、石のペインティングなどを体験した。

そのあと、クライミングセンターでロッククライミングの体験をするのだが、それは一昨年完成前の状態

を見せてもらった施設であった（よかネットNo.31に掲載）。クライミングセンターは屋内の施設で、小さな出っ張りを手がかりに垂直の板を登っていくものである。前回の時は、こんなパネルを張ったオモチャみたいなもので人が来るのかな、という風感じていたが、現在では地元の子どものためのクラブもできていた。隣接する建物は元々炭鉱の事務所であるが、改装されてスポーツジムになった。しかし、まだ谷全体を自然公園化するプロジェクトの拠点施設のひとつが出来た、というところのようである。

### ●ボタ山を馬の形にするプロジェクト

#### ーカーフィリーGWTー

次の日は隣のカーフィリー市にあるGWTを訪問した。ここには、子どもたちが「イギリスに行ってこれを見たい」というきっかけになった、ボタ山を馬の形にするプロジェクトがある。その作業の一部を手伝わせてもらえることになっていた。雨のため、午前中からかなりの予定変更があったが、昼過ぎに小雨になったところでボタ山を見に行くことになった。

イギリスのボタ山は、日本で見かける三角形のボタ山とは違い、台地などにただ撒き散らして「ボタ丘」の様な形をしており、上部は平坦であることが多い。だからボタ山を公園にすること自体は、日本で考えるほど造成などの労力はかからない。

整備中の馬の造形プロジェクトの現場に行くと、事前に見たスケッチから想像していたものより、はるかに大きいものであった。跳ね馬の格好をしているのだが、頭から尻尾の先まで約200mもある。盛り土も高さ6~7mくらいはあつたらうか。ほとんどブルドーザーとパワーショベルの世界で、手伝うと聞いても違和感を感じるほどだった。ただし、馬の顔など細部は

手作業でやっていた。雨も降りだしたため、結局手伝いとして、柳の枝を編んでシェルター兼用の馬の耳にする、という作業を少しだけやらせてもらった。

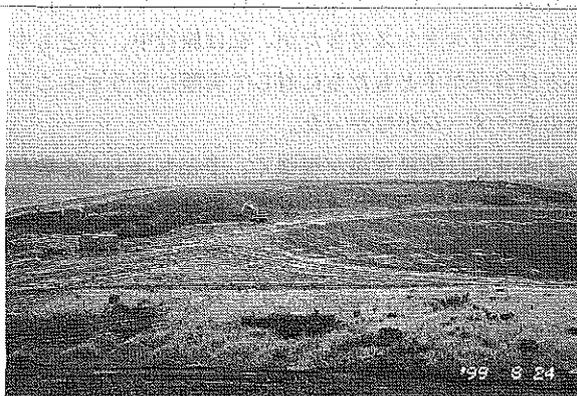
馬は全体がボタで出来ているのだが、蹄やたてがみなどを残して土をかぶせ、芝を張るそうだ。また、腫の部分には大きな石炭の塊で作っており、この場所に炭坑があったことをシンボリックに見せている。

### ●本物の坑道を使った炭鉱博物館

馬の造形の後、炭鉱博物館（ロンダ・ヘリテージ・パーク）に行った。ロンダ溪谷一帯は最盛期には世界に名だたる石炭の産出地で、映画「わが谷は緑なりき」の舞台でもある。施設では炭坑夫の格好をしたおじさんが熱心に自慢げに案内してくれたが、実際に炭坑で働いていた方がほとんどのようだった。

使用していた道具などを見せながら坑内での労働や安全に関する説明の後、全員ヘルメットを被って古びたエレベーターへ。暗くて狭い籠に乗ると、ガタンと動いて少しゆらゆらした。多分エレベーターが下りたように錯覚させて、入った方と反対側の扉が開いて先に進むんだらう、と思っていると（大牟田市の石炭産業科学館がそういう仕組みだったから）、入った方のドアが再び開いて、そこから坑道になっていた。

坑道を歩いていくとだんだんじめじめしてカビ臭くなり、気分を盛り上げた。気分を悪くした子どももいたが、説明のおじさんが「石炭の層が見えているよ」と言ったところは近づいてみるとさすがに張りぼてだったが、エレベーターを含めてほかの設備や坑道は基本的に本物のようだった。坑道の出口はバーチャル型のトロッコ（それこそその場で激しく揺れて、映像で走っている気にさせる）に乗ったりして、子どもにも十分楽しい仕掛けであった。



馬の形にしたボタ山 左が尻尾で右が頭



馬の耳を柳の枝を編んで作る



炭鉱博物館の坑道の中「これを押すと爆発音がして地面が揺れるよ」と炭鉱夫姿のおじさんが説明

施設の最初と最後には、映像で地域の炭鉱の盛衰を物語風にたどったが、さすがにイギリスは残されている映像や写真が多く、産炭地域の最盛期の様子をリアルに感じることが出来た。施設の内容といい、説明のおじさんといい、地域の歴史に対する誇りが存分に感じられて、同じく筑豊の炭鉱町出身の自分としてもとても気持ち良かった。

大牟田市や田川市、直方市などにも石炭の資料館はあるが、ここまでの感動はなかった。昨年、嘉穂郡碓井町の黒川坑で本物の坑道に入ったが、あの様ところが活用できなかった残念である。

●大人が楽しい工作の時間ーブリジェンドGWTー

前日の夜、雨の中での作業などがたたって、子ども10人くらいが熱を出し、急遽3日目のトラストには無理を言って午前中をキャンセルにしてもらった。

午後、製鉄所跡地を産業遺跡公園として整備するプロジェクトのアート・ワークショップに参加。このプロジェクトは芸術家のおばさんが全体をプロデュースしていた。プロジェクトについて6人の芸術家がプレゼンテーションを行い、その中から地域住民によってひとりが選ばれたのだそうだ。

アート・ワークショップは、まずレンガ造りの建物の残る製鉄所跡地で印象的なもの探し。錆びたネジや鉄板のかけらを拾ったり、粘土に樹皮の型を取ったりしてそれを持ち帰った。近くの小学校に移動して、それらも使って記念ブラック（飾り板）づくり。ブラックの作成は、粘土タイルに拾ったネジを押しつけたり、手形をつけたり、模様を彫ったり、あるいはカラーのタイル屑でモザイクを作ったりした。

いわば工作の時間なのだが、特に大人が楽しんでい



大人もはまるブラックづくり

た。子どもも褒めに評価されることのない気ままな工作は楽しかったと思うが、大人の方が子どもに負けじと熱中していた。地域づくりにおいては大人は無関心の人や反対をする人が多いので、イギリスのGWTでは、教育を含めてまず子どもに楽しんでもらい、子どもから大人を巻き込んでいくという手段を良くとるそうだ。我々もまんまとはめられていた。

みんなで思い思いのものを作ったとはいえ、全体像は芸術家のおばさんの頭の中にできている。時々、大勢で書いた壁画などで落書きの寄せ集めみたいになっているものがあるが、全体をコーディネートするという人、あるいは思想がないからだろう。ここでは芸術家が全体イメージの中にうまく当てはめていくことで、統一感のある作品に仕上がることと思う。

作ったブラックは、一部はお土産に持って帰ったものの、大半は現地で焼いて、産業遺跡公園の壁面か地面を飾ることになる。いずれ、また完成したのを見に行きたい気もする。と思わせてリピートさせることもプログラムのうちのなだろう。

●子供中心とは

今回のツアーは「子どもが主役、子ども中心で行こう」というスタンスできたが、私は旅行中、子ども中心とは自分が子どもたちに対して実際にどうすることなのかイメージがなかった。

イギリスは階級意識が根強く、子どもは大人を敬わなければならない。そういう風に教育される。よって子ども優先という考え方はない。レストランでの食事を運んできた時に、誰かが「子どもたちに先にあげて下さい」というと、ウェイターに怪訝な顔をされた。

GWTでも、子どもに対する活動にはかなり重点が置かれているが、教育という面はあるにせよ、地域の改

善を進めるために子どもの参加が有効と考えるからである。子どもは楽しいことであれば、しかもそれが良いことにつながると感じていれば、参加して来やすい。子どもが家に帰ってGWでやった楽しい出来事話することで、無関心だった親が理解し始める。そうして徐々にGWの活動を知ってもらい、イメージアップし、地域全体が参加するプロジェクトが進めやすくなるのである。

子どもだけでは地域を動かす力はない。大人がその気になって初めて動く。子どもの活動を起爆剤として、大人がそれについてこないといけない。「子ども中心」とは、子どもに何かをさせて大人は見ている、という

ことではなく、子どもも大人も一緒にやることにつながっていないといけない。そうでなければ学校行事のひとつに終わってしまう。

今回の旅は、子どもが25人に対し、大人は保護者を含めそれ以上参加した。しかも子供と一緒に熱中した。次につなげていく上で、このことは重要だったように思う。

帰ってきたGWjr.の子どもたちは、経験を生かして地元で公園を作りたい、と言っている。我々も「勉強してきました」では物足りない。土地の問題などハードルはあるが、近いうちに成果を形にしようと考えている。(いとう さとし)

いま田舎は、まちの情報をこんなに仕入れている①

～第59回地域ゼミから

尾崎 正利

最近、一般の雑誌などで農業をテーマにした特集記事を見かける。共通しているのは、個人経営者として都市部や集落内、他の地域に様々な独自の人のつながりや情報の窓口を作っている人が多く紹介されていることである。第59回地域ゼミでは、農村と都市の情報交流と経済活動に注目しようということで、農山漁村の産業や人々の暮らしをテーマに出版や情報発信を手がける、(社)農山漁村文化協会(以下、農文協とする)の九州・沖縄支部事務局長の高群正春さんにお話をお願いした。

農文協には「どぶろくを作ろう」(前田俊彦氏)、「諸国どぶろく宝典」(貝原浩氏、共著)などの本で、私もお世話になっている。

8月24日のゼミの当日は、陶芸家、最近百姓になったという新参就農者、農政や商工関係の部署に所属する自治体職員、遠くは県外から駆けつけた女性、雑誌編集者などの顔ぶれがみられた。

以下では高群さんのお話の概要をとりまとめた。

(郵便局か農文協か、と讃えられる“行商”方式)

・農文協は昭和15年、農林省の外郭団体として発足。初代協会長は有馬頼寧さん(元久留米藩の当主筋にあたる)で、戦時中には当時、農村で慰問劇団(瑞穂劇団)を手がけてた宇野重吉さんがその任についていた。

- ・戦時中は国の食糧増産体制を推進するための作付けや農作業の指導等を行っていたが、戦後、昭和22年に再建し、農村の生活や人々の健康の向上、生産技術の啓蒙を目的とする事業を展開し、その中で「農村文化」など出版を中心とする活動をはじめた。
- ・全国に出版社は3千社あるが、農文協は平成10年度の売り上げ額は約60億円で100位、出版点数では80位に位置する。普通ベストセラーといわれる本でも東京・名古屋・大阪の大都市圏で半分以上を稼ぐのが出版市場であるが、農文協の場合、売り上げの6割は地方の直接ユーザー販売(各地の農漁家や農漁業など)で占めている。
- ・地方ユーザーの開拓には、営業と地域情報の収集に日夜とりくむ、農文協ならではの“普及活動”の役割が大きい。
- ・この“普及活動”のために全国で117台の50CCのカブが用意されて、普及部隊が文字通り「人の住んでいるところはどこまでも」津々浦々を毎日25軒、農家、農協、役場、農業高校、改良普及所を中心に訪ね回っている。
- ・道路網が整備される前は、班を組んで一軒一軒、農家を泊まり歩く自炊型の普及活動も行ってた(ちなみに高群さんも20数年前、椎葉に行き椎葉秀行・クニ子夫妻に普及したことがある、という)。
- ・津々浦々に行くため泊まりがけの遠征をすることはしばしばあるが、少ないコストで最大限うまいメシを食べられる旅籠の情報リストは普及部隊の財産として受け継がれている。

- ・今時そんな営業活動は「田舎では郵便局と農文協だけ」という声もあるが、これは農文協の誇りにもなっている。最近の新入職員には女の子でパワーのある娘さんも増えてきた。1年通して50ccのバイクで地方を行商するかなりハードな仕事にやり甲斐を見出して、張り切って出かけていく。
- ・普及部隊が集める情報は、取材や制作・企画に集約されて、新しい誌面づくりに生かされる。農文協ではその他の事業部門として、文化活動（食と健康を考える会など）、教育活動（食と農を教育に）を行っている。

#### 〈革靴姿では話かけない。農作業は手伝う。これが農村における情報収集の秘訣〉

- ・農業は土を耕すことが生業の基礎だから、普及活動では、そうした農家の方との出会いにおいて、こちらの身なりで受け取られ方が大分違って来る。スーツに身を包みきれいな革靴をはいて道路の上から話しかけてもまず相手にしてもらえない。雨靴と雨合羽で土に足を踏み入れることで、うち解けた話ができるきっかけとなることが多い。
- ・繁農期では、こちらの商売とはいえ農家の作業の手を止めさせるわけにはいかない。例えば稲刈り時期には機械で刈っている最中は話しかけない。田圃の四角で機械が方向転換する時を見計らって「精が出ますね。一息どうですか」とやると、グッと和んだ雰囲気ができる。ついでに稲刈りまで手伝っていき、まず間違いなく話を聞き入れてくれる。
- ・以前は、普及活動ついでに畑仕事を手伝い、一緒に農作業を終えると、集落の集いに誘われ酒を振る舞われ、その場で即興の踊りを披露するなど田舎のドサマわり役者のようなことまでやっていた。

#### 〈農村の情報化が進む。リアルタイムの通信技術が都市・農村の双方の情報交流を可能に〉

- ・農文協は本屋とのオンラインシステムを出版業界でも特に早い時期に取り入れてきたが、最近では全職員がノート型パソコンを持ち歩いている。普及部隊も50ccのバイクに積んで回っている。これを使って、全国各地の農村で動きまわる普及部隊が電子メールで本部（東京赤坂）に日報を毎日送っている。
- ・「私はここでこういう話をしました」「誰それは・・・に関心を持っています」「××について聞かれました」など日々の農山村の人々の関心を事細かに送ってい

る。これが一晩で集約され、翌朝、全員が全国どこからでも見られるようになっていて、問題解決や情報サービスに役立てるやりとりはまでシステム化している。こうした些細な情報は次の取材、制作のネタさがしにもつながっていく。

- ・その他、全国3千以上の市町村の農業データ、朝市情報データ、農産品データなどをデータベース化し、一部をCD-ROM化して、出先でパソコンを一括にみながら問題提起を行うこともある。
- ・一般向けにはルーラルネットというホームページを開設しており、農家同士の技術情報交流や農業関連の図書情報、教育や文化交流情報などが掲載されている。これで“ドブロク”や“朝市”などのキーワードで検索すれば、全国のドブロク情報、朝市情報などもわかり、関連図書の紹介もしている。
- ・こうした動きは、田舎の方で産地情報や技術情報、都会の人のニーズなど、農業経営に重要な情報を積極的に得ようとする人が増えてきたこともよる。後継者のいない、おじいちゃん、おばあちゃんが披露する農業技術でも、個人情報のネットワークで様々な人が受け継ぐことができるようになってきている。
- ・こうした仕事の集大成の例に、制作・出版に13年かけた日本の食生活全集（各都道府県＋アイヌ編、辞典含めて全50巻）の事業がある。各県、3年程度かけて、各地の農村・漁村・都市の高齢者に取材し、大正末期から昭和初期の頃の日常の食事が紹介されている。特殊な郷土料理のレシピではなく、日々の食生活の姿を通して地域文化を語り継ぐ想い出絵巻ができた。

#### 〈医・食・農・想の思想をもって高齢社会を乗り切ろう〉

- ・平成10年、新規就農者は全国で10万人。その6割が55歳以上の人になっている。業態としての体力勝負の農業でなく、自分の体力で身の丈に合った“チンタラ型”といえるペースで始める人も増えてきた。
- ・食べ物や自然環境に対して、子供、お年寄り、女性が一番敏感である。だから生活者に対する農業の役割「医・食・農・想」（健康・食べもの・農法・考え方）による捉え方が重要になるのではないか。
- ・農村と都市は対立の概念で捉えられることが多いが、最近の都市と農村の情報の相互交流をみていると、それぞれに属する生活環境や職業が違う人たちが、お互いに触発し合って共生しようと歩んでいるように

もみえる。これからは情報の結びつきを、人の結びつきにまで高めることがポイントになるのではないか。

#### 〈都市の人同士の様々な農山村の情報交流に〉

お話の途中にも出席者の間で様々な意見や質問が出て、その中にはテーマとして追求しても楽しそうなものもあった。これは日を改めて私が連絡係をする2農8サラの会で検討してはどうかとも思った。以下、出された意見を一渡り整理してみた。

- ・「金なし暇ありの高齢者にとって、自給生産だけしとけば金は節約できるから百姓が一番いい生活になる。金を稼がなくても暮らせる程度の百姓をやりたい」
- ・「農業はいいが子供の頃の経験からいえば楽ではない。新規就農の失敗事例の研究も知りたい」
- ・「農を特集する雑誌も増えて来てきたが、一般市民に向けた情報も、きっかけづくりのミーハー型で良いのではないか」
- ・「認定農家の認定は生産額だけでなく、どれだけ情報出しているか、とか都会の人間を引っ張っているか、など経営の特徴に合わせてやれないものか」
- ・「その昔、農文協の本で複合経営の話が出ていて、杉の植林をせず、雑木林で炭焼きや椎茸をする複合経営を目指している林業の村の話があった。一攫千金型でない、自然を無理なく生かす、土地柄に合った経営は、結局どの産業でも着実な結果を得るベースになっている」 (おざき まさとし)

いま田舎は、まちの情報をこんなに仕入れている②

～個人農家が主催する水車小屋祭りに  
300人が集まった。  
尾崎 正利

#### 〈豚一頭の丸焼きを見て熱い胸騒ぎ。〉

高群さん（農文協九州・沖縄支部）にゼミでお話をうかがう前の8月10日、私は高群さんのお誘いで、宮崎県の山田町に遊びに行った。「第2回水車小屋祭り」という案内状を頂いていたのだ。

うたい文句として、1. 豚の丸焼き、2. 合鴨たたき、3. 鴨鍋、4. 講演（萬田英美さん。宮崎県綾町で農業をされて、全国合鴨水稲会事務局）、5. 踊り（藤間流山田町支部、演目：二輪そうなど）、6. 大正琴（琴峯美会、演目：さくら貝の歌、旅愁、炭坑節、軍歌）、7. 水車越しに眺める町の花火大会、8. 花火の後に焼酎片手の交流



祭りの30分くらい前の様子。飴色に焼けて水車の動力で直火の上を回ってグリルされている。

会、とあって、その後は、女性は町の温泉施設に泊まり、男性は“その場で野宿”と書いてあった。

8月10日、飛行機と車で福岡からはるばる4時間かけて、祭りの会場である地元の農家、吉見幸男・カツ子ご夫妻の庭に着いた。庭といっても1千坪近くありそうな広さである。庭に入って驚いたのは、受付がなくてまず祭りの参加者の記帳をしていたこと。そして子豚が一頭丸々、“ひらき”の状態でたき火の上で回っていた。塩をベースとする特性の調味料に1昼夜漬け込んだのち、8時間かけて丸焼きにされている。そのアメ色の焼き色からみて、仕上げの段階にあるようだ。

#### 〈一軒の農家の水車小屋の祭りに300人以上の人が各地から訪れに〉

吉見さんご夫妻は、全国の農家のうち、かなり早い時期から合鴨農法で米づくりに取り組んできた農家として知られる。また、庭に水車小屋があって、動力をもって石臼、オルガン演奏などもやっているが、その水車は日本水車協会の研究対象にもなっているという。この祭りにもその協会に関係する建築関係の先生方がお見えであった。

祭りは夕方5時に、宮崎大学農学部動物生産学科の園田立信教授と研究室の学生さんたちが取り仕切って、子豚レースや合鴨レースなどから始まった。

庭のそこかしこで参加者が選果用のプラスチックの箱を逆さまにして板を乗せて、机とイスにしている。合鴨のたたき、鍋、子豚の丸焼き、キビ飯などが振る舞われ、来ていたお客さんはこれをつまんでいたが、催しものの踊りと歌がはじまる8時過ぎに辺りをみると、かなり人出があって300人以上は確実にいた。

実はこの時まで、私は山田町が町主催の祭りを、ご夫妻の庭を借りてやっているのだと思っていた。しか

吉見の丸太水車小屋  
ありがとうございました。

拝啓 水車ごしの山田の花火はいかがでしたでしょうか。この度の「第2回水車まつり」において頂き誠にありがとうございました。その前々日まで雨ばかりで心配しておりましたが、当日も水車小屋の1キロ近くまでどしゃぶりの雨でしたが、お陰さまで盛大なまつりとなりました。頂き物、心よりありがとうございます。舞台が壊れはすまいか、丸太が転がりはすまいか、真夏の食物は大丈夫でしょうかと心配しておりましただけに、こんなにも盛大にして頂きただただお礼申し上げます。(お礼状「300X450X100」1枚、目録「お礼状」)  
これからも時々吉見の丸太水車小屋から、ほろふき屋のほろふきを送りたいと思います。どうかご指導等よろしくお願ひ申し上げます。  
大変遅くなりましたがありがとうございました。



忘れ物=カメラのカバー・子供の財布。子供の履物片方。  
尚 吉見のほろふきはひと手数がまざれ込んでおりましたら、お手数ながら書いてお送り頂けたら幸いに思います。次回の水車まつりの時ひょっとか踊りに使いたく思います。(お礼状「300X450X100」1枚)

デジカメによる個人のスナップがあって、見るたびに思い出せる。時間延長の効果抜群!

し、近所の人に聞くとそうではないという。吉見さんご夫妻が主催し、近所の養豚場の方やトウモロコシ農家などが協力したほとんど個人主催というような感謝祭だという。そしてお客さんは、近所の人も多いのだが、名古屋から来た小学校の校長先生や、宮崎大の農学部の先生、北九州から来た水車研究家、山田町に活動拠点をもつカライモ交流財団の理事など、様々な人

がいた。それらの人々は一応、吉見さんご夫妻やその仲間たちと、何らかの関係をもつネットワークだという。何となくはじめの「記帳」の意味が少し分かったような気がした。この農園は既に各地に独自のファンを持っているのだ。農業経営としての吉見ご夫妻は、合鴨米、畜産(豚)、合鴨、薩摩芋などを出荷し、個人向けで全国各地にも販売しているというが、水車や合鴨農法などで独自の人のつながりをもっているということだろう。

人が最も多くなったとき、このご夫妻は全てのテーブルを回ってお客にご挨拶し、一杯ずつ焼酎をすすめては記念ですからと一丁度デジカメで撮影して回っていた。

〈デジカメによるお便りに感激〉

祭りを終わって福岡に帰り、早速お礼の手紙をお送りしたところ、すぐに返事のお手紙をいただいた。開けて驚いた。お礼の文面なのだが、それが私と高群さんが並んだ写真に書かれている。あの時のデジカメによることは明らかなのだが、こうしてご夫妻は一軒ずつ個別の返事をお送りされているのだろうか。

手紙の文面には「三年に一度の祭りは楽しみです。百姓も楽しみなしにはくたびれてしまいます」と書かれてあった。合鴨農法や水車関係の集いで自らも頻繁に福岡などにも頻繁に出向いているとのこと。都会の情報仕入れも熱心に行っておられるのだろう。

自らのファンづくりをもって、来た人に喜びの時間を持続させてくれる農家の方に出会って、とても印象に残る旅だったと思う。(おさき まさとし)

ISO14001 を取得するとは?

澤谷 真紀子

一昨年、水俣市を訪れたときは、不燃ごみの18分別に驚かされた(よかネットNO29, 1997. 11)。それから2年が経ち、不燃ごみは20分別となり、環境モデル都市水俣を訪れる見学者は国内だけに止まらず、世界各国から集まって来ている。

環境に関して最先端に行く水俣市は、今年4月に環境マネジメント規格であるISO14001を取得した。この

ような取り組みの話を開きに行くという「遠賀川ふるさと川づくり川づきあい交流会」の植木さんからの誘いで、再度水俣を訪れる機会を得た。

〈ISOとは〉

私が最初に「ISO取得が企業のイメージアップになる」と感じたのは、一昨年、台湾の空港のみやげ品店に立ち寄り「ISO9001○△□・・・」という大きな看板を目にした時だ。その頃、日本では日本企業は今からはISOを取得しないと国際競争に打ち勝てないと言われて始めていた頃だと記憶している。それから2年後の1999年8月時点では、日本のISO取得件数はISO9000

シリーズで約3,300件、ISO14001は約2400件で世界一の登録件数となっていた。

さて、ISOであるが、一般的に9000シリーズと呼ばれる製造物にかかる国際基準と、14000シリーズと呼ばれる環境分野の国際基準がある。特に14001は環境に関するマネジメントシステムであり、水俣市が取得したのもこれである。ただし、14001に限っては、国際基準と言いながら、自分のところで作った環境にかんする基準(=自分のところでしか通用しない基準)と目標でISOが取得できるか出来ないかがほぼ決まる。

ISO14001は行政やサービス業が取得してきているということだが、何故、商品や技術力(ISO9001にかかる)で国際競争に参加しようとするところではない行政が取得しようとしているのか、国際的に何かを認められようとしているのか、それ以外に何かメリットがあるのかについて水俣市の例からみてみたい。

#### 〈何故、ISO取得を思いついたのか〉

- ・市長がある講演会でISO取得についての質問を受けたことがISOについて市が意識し出すきっかけとなった。その後、ISOについて市長、職員が勉強を行い、環境モデル都市を目指し、海外からの視察も多い水俣市では国際的な環境基準であるISOを取得すべきだろうという結論にいたった。
- ・同じ頃、㈱チッソがISO9000シリーズの取得に取り組んでおり、㈱チッソ関連の会社もそれに続くと考えられた。水俣市の1/3もの世帯は㈱チッソ及びその関連会社の従業員及び家族であり、㈱チッソがISOを取得すれば、その関連企業も取得せざるを得ない状況になると考えられる。水俣市がISOを取得し、市内の中小企業から取得したいという意向がある時に、市がアドバイス等を行うことができ、民間のコンサルタント等に相談する費用が、はぶけるとも考えられる。

#### 〈ISO取得の効果〉

- ・ISO取得までの間やってきたのは、これまで色々な部局、課で行われてきた環境に関する取り組みやその手順を書類に残し、市全体で取り組もうと体系的にまとめただけで、取得のために水俣市が新しい方向を示したり、新しい事業を興そうとしたことはそれほどない。
- ・環境に関する庁内の動きを体系的にまとめることによって、これまで各課が個別に行ってきた事業など

#### ISOとは

- ・1947年設立のスイス、ジュネーブに本部を置く民間の「国際標準化機構」
- ・ネジやフィルム感度などに付いている「ISO」の認証機関・日本では「日本工業標準調査会(JISQ)」が加盟
- ・従来の製造品等の品質管理にかかる「ISO9000シリーズ」と環境管理規格の「ISO14000シリーズ」がある

#### ISO9000シリーズの認定を受けると

- ・最近では、国内の一部の公共事業や海外の経済協力プロジェクトの入札資格審査にISO9000の認定を受けていることが条件とされるところもある
- ・特に、EUへの輸出品についてはISO9000の認定を受けていることが条件となるものもある
- ・国内ではISO9000を取得の後、海外へ向けての企業イメージ向上等のためISO14001を取得するところも多い

#### ISO14000シリーズとは

- ・ここでいうISO14001とは、ISO14000シリーズの一つで、生産、サービス、経営に際して環境対応の立案、運用、点検、見直しといった環境管理・監査システムの認証のことである
- ・海外へ向けてのPRや、業務のシステム構築による効率化が図れるというメリットが云われている
- ・数値的基準(目標値)はなく、団体毎の環境に関する項目についての努力目標とその達成状況がISO14001認証のカギとなる
- ・平成11年9月時点(環境ISO自治体ネットワーク調べ)で自治体及び国の機関の登録状況は以下のようになっている

日本：29件(内13件は研究所、下水処理場、ゴミ処理施設、浄水場等)  
 イギリス：10件  
 中国：10数件の自治体が取得  
 アメリカ：9件(内8件は交通局、公共土木、下水処理施設、刑務所、発電所等)  
 カナダ：3件(内2件は廃棄物処理施設、下水処理施設)

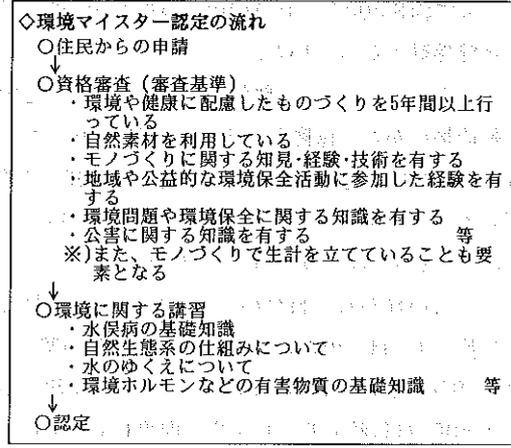
が各課横断的に取り組んだ方が良いものもあるということがわかり、担当者個人の役割や協力体制が取りやすくなった。

- ・また、昼休みの消灯、コピー用紙の裏紙の使用など、電気やガス、紙などの節約・節減に努めたため、目に見える効果としては、平成10年度に、電気料が昨年比7%、用紙代で27%の節減ができた。

- ・効果の大きかったものとしては、市のイメージアップと住民への宣伝効果があげられる。住民からは「家庭版ISOをつくりたい」、学校から「学校版ISOをつくりたい」などの声もあがってきている。

※家庭版ISOは、家庭で購入したもの(食料や家具、電気製品等)がどのように廃棄されていったかを表にした家庭用マニフェスト表(お金の流れを見るのが家計簿だが、これは購入した物の流れを見たもの)と同様のものだが、住民が積極的に取り組んでいる例というのをはじめて聞いた。

環境目的 (これをもとに目標を設定している)	数値目標有無
<b>環境モデル都市づくりの推進</b>	
水俣病犠牲者を慰霊し、祈りを捧げていく	×
「環境水俣賞」の授賞、東・東南アジアでの環境保全活動を顕彰する	×
「水俣病語り部」により水俣病の教訓を伝える	×
水俣病の原点の地である水俣湾埋立地に、住民協働 (もやい) で「実生の森」を育てていく	×
事業活動による環境汚染の監視	×
ピオトープの整備 (平成12年までに、ピオトープを3カ所整備する)	○
海べりの保全	×
水源涵養の森づくりの推進 (「みんなの森(2.3ha)」を住民協働で育てていく)	×
民間人工林の除間伐促進 (平成12年までに655ha促進する)	○
公共下水道の整備 (平成12年までに、公共下水道の普及率を36%にする)	○
合併処理浄化槽の普及 (平成12年までに合併処理浄化槽を320基、累積設置基数を544基にする)	○
一般家庭ごみの減量化対策推進 (平成12年度までに一般家庭ごみの総量を毎年1万2千t以下に抑える)	○
一般家庭ごみのリサイクル推進 (平成12年度までに一般家庭ごみのリサイクル率を18%にする)	○
フロンガスの回収 (平成12年度までに家庭排出粗大ゴミのフロンガスを160kg回収し、総回収量を200kgにする)	○
公共事業における工事材料の使用削減に努める	×
公共事業における建設廃棄物のリサイクルに努める	×
地区の環境保全のため、地区の約束事を文書化した「地区環境協定」の締結支援 (平成12年度までに3カ所)	○
事業所の環境管理システム認証取得の支援 (研修会の開催)	×
環境に配慮したものづくりを進める環境マスターの認定 (平成12年度までに15人認定)	○
環境に配慮した店づくりを進めるエコショップの認定 (平成12年度までに5店舗認定)	○
<b>地球温暖化防止に向けた省エネルギーの推進</b>	
電気使用量の削減 (平成12年度までに、別途管理する施設等を除き、電気の使用量を4%削減する)	○
LPG使用量の削減 (平成12年度までに別途管理する施設等を除き、LPGの使用量を1%削減する)	○
重油使用量の削減 (平成12年度までに、別途管理する施設等を除き、重油の使用量を8%削減する)	○
灯油使用量の削減 (平成12年度までに、別途管理する施設等を除き、灯油の使用量を7%削減する)	○
公用車両燃料の使用量の削減 (平成12年度までに、公用車による燃料の使用量を1%削減する)	○
通勤車両燃料の使用量の削減 (平成12年度までに、通勤車両による燃料の使用量を1%削減する)	○
<b>市役所で使用する資源の消費の削減、リサイクルの推進</b>	
紙の消費量の削減 (平成12年度までに、別途管理する施設等を除き、コピー用紙の購入量を5%削減する)	○
リサイクルの推進	×
グリーン購入の推進	×



り、天然繊維和紙をつくっている方で、市のPRの甲斐もあってか商品の需要に対して供給が追いつかない状況である。

そのため、マスターからは仲間を増やしたいという要望があり、独自で講習会を開くなどして、知恵の受け継ぎを行っている。

水俣市の場合は環境モデル都市として海外へもPRしていけるということ、既存の活動をもう一度見直し再整理したということが最大のメリットであったと思う。環境マスター認定制度や家庭版ISOのような住民を巻き込んだ活動は、市のこれまでの取組があったからこそ出来たものであり、逆にいうなら、ISOを取得しなくても水俣市なら出来る可能性は十分にあったと思う。

現在、多くの自治体が総合計画の策定過程にあり、お手伝いしているところでもISO14001取得の話は出ているが、それぞれの自治体の環境への既存の活動や環境に対する姿勢を考慮し、取得した後の効果、取得しないと出来ないこと・しなくてもできることを検討する必要があると考えている。(さわたに まきこ)

**竹富島紀行**  
 ~文化遺産・生活空間・観光資源という3つの顔を持つ南の小さな島~  
 小田 好一

〈特色ある取組～環境マスター認定制度〉

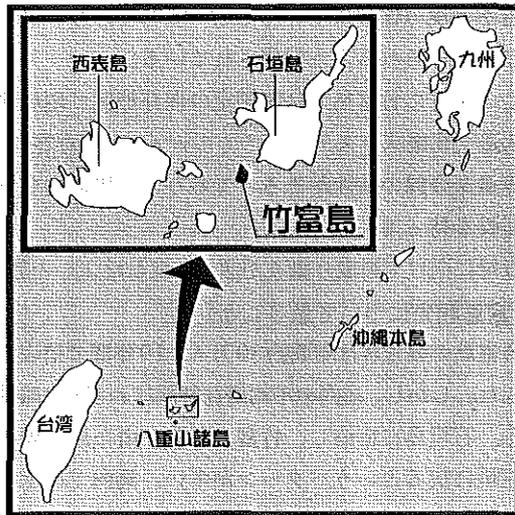
- 水俣市の環境基準は3年ごとに見直しながされる目標を数値で表せないものが多いのだが、特色ある取組として「環境マスター認定制度」があげられる。
- 環境マスターとは、環境に負荷の少ないものづくり (石積み、大工、左官、和紙づくり、農林漁業) をしている方のことで、市が認定、作品のPRを行い、商品の安全性や優れているということを市が保証をしますというものである (但し補助金なし)。
- 平成10年度の認定者は有機野菜・お茶・いりこづく

私が学生の頃に所属していた研究室では竹富島の伝統的景観について研究を行っている。

この夏、研究室の竹富島 (調査) 旅行があると聞いて、学生の頃一度行ったことがあるのだが、久しぶりに行きたくなり、参加することにした。

〈竹富島とはどんな島か〉

竹富島と言えば赤瓦屋根の家屋、それを取り巻く珊瑚が積まれた塀、白砂が敷き詰められた道といった沖



縄の伝統的な街なみが今も残る島である。

沖縄本島では首里城が復元されているが、戦争による破壊、台風などにより、伝統的な赤瓦の町並みが残る地区は数少ない。竹富島のある八重山諸島においても台風対策のため、他の島のほとんどがRC造に姿を変えており、竹富島は昔の南西諸島の生活を知ることのできる貴重な島である。

島の周囲は約9km、面積は約5k㎡の島で人口は約300人(平成11年現在)竹富島の高齢化率は33.6%(全国郡部平均18.8%)(ともに平成7年)と高く、産業は民宿など観光に関連するサービス業が3割、島内バスや、船舶券販売などの運輸・通信業が3割、お土産店、飲食店などが2割となっている。就業者の8割が観光関係に従事している島である。

竹富島を含む9つの島で構成される八重山郡竹富町は、人口約3,500人(平成7年現在)、離島への航路はすべて石垣島が起点となっている。そのため、竹富町役場は石垣市内に立地している。

竹富島から人口約4万人の石垣島へは船で約20分、竹富島内にスーパーなどはほとんどなく(民宿には小さな売店がある)、買い物には石垣島へ出かける。水道も石垣島から引いており、石垣島に生活の多くを依存している。

(町並み保存だけでなく、伝統文化など特有の無形文化も伝えられている)

現在、竹富島では「(仮)町並みセンター」が建設中である。

このセンターの役割の一つに伝統文化の継承があり、伝統文化の練習の場、発表の場となる予定である。

#### 竹富島の年齢構造(平成7年)

年齢3区分

単位:人、%

	年齢別人口	比率
総数	262	100.0
0~14歳	40	15.3
15~64歳	134	51.1
65歳以上	88	33.6

資料:国勢調査

#### 竹富島の産業別就業者数(平成7年) 単位:人、%

	就業者数			比率
	総数	男	女	
総数	133	70	63	100.0
農業	3	3		2.3
林業	0			0.0
水産業	12	11	1	9.0
鉱業	0			0.0
建設業	5	5		3.8
製造業	10	1	9	7.5
電気ガス等	0			0.0
運輸・通信	36	26	10	27.1
卸・小売業	24	8	16	18.0
金融・保険業	0			0.0
不動産業	0			0.0
サービス業	42	15	27	31.6
公務	1	1		0.8

資料:国勢調査

水産業に含まれる業種:エビ養殖(1)

運輸・通信に含まれる業種:島内バス・観光バス

(1)、遊覧船(1)、船舶チケット販売(2)

卸・小売業に含まれる業種:おみやげ屋(4)、飲食店

サービス業に含まれる業種:民宿(13)、レンタルバイク(3)、マリッジ(1)、水牛車観光(1)等

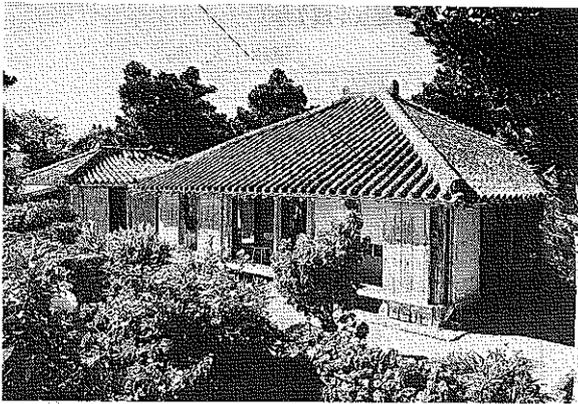
( )内の数字は業者、店舗数、世帯数(やえやまGUIDE

BOOK2000年版調べ)

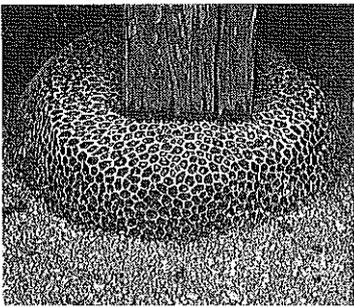
民宿と他の業種をかねているところは民宿のみで挙げている。

現在すでに、毎日のように竹富島小中学校の体育館で伝統文化の発表会が行われている。わたしがいたときも竹富の民謡を方言で読む大会や三味線の大会が行われていた。竹富島だけの大会もあれば、八重山諸島での地区予選もある。大会はわたしが訪れていた時期だけでなく、8月~9月は毎日のように体育館で何か行われているということだった。夜になるとこのような伝統文化の発表会が何よりの娯楽になっているようだ。

もう一つの役割として、竹富島の町並み、歴史資源をもっとの内外の人に知ってもらうことである。竹富島は台風が多く、シロアリも多い。伝統的家屋はそれらの条件を克服し、長年の生活の知恵が結集する場所である。その家屋は台風には耐えられるよう、周囲に珊瑚を積んだ塀が施される。また、次ページ写真右や中央奥に見えるフクギと呼ばれる幹の太い屋敷林によって囲まれている。瓦は漆喰でしっかりと固められ、下から吹き上げる風に対しても強い。家屋の周囲にある



竹富島の伝統家屋（大正期）



珊瑚でできた基礎

引き戸は開け放すことができ、風を最大限に取り入れることができる。建材はシロアリに強いものが使用されている。また、家屋の基礎には珊瑚が使われる。水はけがよく、木が腐れ難い。

このような竹富島の伝統工法をこれから新築する建物にも活かすというモデルケースでもある。

この建物は文化庁の補助事業による建築物で（建築面積は約500㎡、平屋）文化庁、沖縄県、竹富町、計1億5,000万の総工費をかけられている。壁に御影石やガラスを使用するなど、将来の重要文化財を念頭に置いて建設されているようだ。

#### 〈竹富島で世界遺産の話が挙がり始めている〉

竹富島の家屋の建設で木材はイヌマキというこの地方で採れるものを使用する。イヌマキは丈夫で、シロアリに強く、腐りにくいという特徴があるが、竹富島ではほとんど採れないため、昔から西表島に採りに行っていたという。

世界遺産の登録に向けて、伝統的な地域独特の木造文化を継承するものとして、竹富島集落と西表島の自然環境を一体的に考え、かつての材木採取のシステムを復活させようという声が始まっているという。

また、世界遺産を保護するバッファゾーンとして機能するものとして竹富島町並み保存条例があり、それ

は自然環境の保護についても述べられており、島全体の景観が守られるよう配慮されている。

このように竹富島では国指定の保存地区、地域密着の木造文化継承システム、バッファゾーンの存在など、世界遺産登録の条件がそろっており、世界遺産登録の可能性を持っている。

登録に向けての取り組みが活発になればよいと思う。

#### 〈竹富島観光について思うこと〉

竹富島の観光客は年間約30万人、10年間で倍以上になった。しかし、島内の平均滞在時間はわずか2時間である。石垣島に宿泊し、竹富、西表、由布島を周遊して石垣に戻るというパターンが多い。島内では水牛車に乗って、集落内を観光し、次の島に行く。滞在時間が短くお金を落とす人が少ないのが竹富島観光関係者の悩みのようだ。

旅の楽しみの半分は料理ともいわれるが、竹富島には、名物といわれる食べ物が少ない。八重山そば※というのがあるが八重山諸島一帯でも食べられる。その場所ではしか食べられないものを探すのが私にとっては欠かせないが、唯一この島で探せたのは「エビそば」である。八重山そばに大きな車エビが10匹ほど入っている。

竹富島ではエビの養殖が行われており、主に福岡方面に出荷されているようだ。結局、エビ以外に特徴的なものはなかった。

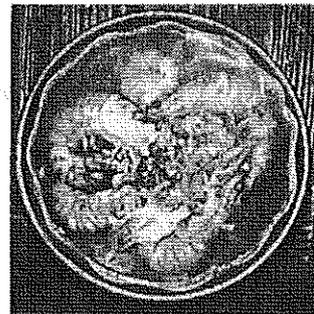
こういう資源をもっと活用して、おいしく竹富島でしか食べられないものを開発すべきだと思った。

世界遺産になれば、伝統的な町並みが世界的にも認められ、町並みもさらにきれいに整備される。

伝統文化も町並み保存センター等の活動で継承され、島の文化は有形、無形を問わず形を変えずに継承されていこう。

観光で食べていくためには「もてなし」が必要であり、観光客をもう少し長い時間、楽しませるような工夫が必要だと思う。

エビそば  
エビは上に乗っているだけでなく、中にも入っている。



※八重山そば：麺はこしがあり、うどんくらいの太さでスープはとんこつ、かつおが使われる。  
 〈リゾート構想が進められている文化財の島〉  
 今、この島で、マリンレジャーを楽しめるリゾート構想が挙がっていて、集落とは別の場所にリゾートエリアを展開するそうだ。リゾート開発により雇用が生まれ、滞在客の増加による経済効果を期待したものと思うが、集落と切り離して考えられているのはなにか淋しいものがある。それに、リゾート開発により島の

景観が大きく変わると、世界遺産の登録から遠ざかってしまいはしないだろうか。

集落内には民宿やお店があるが、観光客がお金を落とす場所が変わってしまい、集落がさびれることも予想される。

これまで述べてきたように、小さくても話題の絶えない竹富島だが、今後、南国の典型的なリゾートアイランドにならないよう見守っていきたい。

（おだこういち）

## 所 員 近 況

### 近況1—モズが枯れ木で・・・、マッカッカカーソラノクモ

〈自然のモノオキ棚〉毎朝と言うより1日中モズがうるさく、キキキキキとわめいています。ヒヨももつとうるさい声をたてている。わが家は動物天国で、朝新聞を玄関まで取りに行く時は、枯れ木で腕を大きく円を描くように回しながら歩きます。これは蜘蛛との住み分けを主張する儀式です。円の上や上方左右は彼らの縄張りで、私の頭上を覆うようにたくさんの網が残っている。守宮もいます。もぐらもいます。夏には蛇もいた。蚊もいっこうに減らない。私は特別にやさしい体質をしているので、他の誰にも寄りつかなくても、私には2～3分の間に十ヶ所も刺す。家にいる蜘蛛にもふれておきたい。小さい飛び蜘蛛と大蜘蛛がいる。それは、脚を上げて歩いている（すごく速い）時は15～20センチもありそうだ。人間には何もせず、こまかい虫など取ってくれるので有難いはずなのだが、やっぱり気持は良くない。

「マッカッカカーソラノクモ」というのは、わが家の真西にある可也山にかくれる夕陽をとりかこんで、茜色の夕焼け空が望めるという話。この夕景色のすごさは、絶対に満足いただけると思う。夕方5時から6時過ぎまでの大パノラマは何度見ても見あきない。わがサニールームでビールを飲みながら、焼酎を飲みながら、いい気分だ。

樹木や花のことも書きたい。柿はウロウロしているうちに、カラスが我もの顔に、色づいて味がよくなったものから食べてくれた。樹がたくさんあって小鳥の楽園にもなっているが、植物図鑑を買わねばならんと

思っている。今のところ、朝と夕方、キンモクセイの匂いをきいている。

屋敷の中の畑は、目下手入れ不足で草ボウボウ。芝生だけは刈るようにしているが、そこにも雑草が生えだして、油断にならない。

「英彦山は自然の博物館」という字を見ながら思いついた。そんな言い方にならうと、わが家も、動物、植物、空の景色も入れると、「自然のモノオキ棚」ぐらいにはなりそうです。まずは「夕陽ヶ丘の自然のモノオキ棚」の報告です。

### 近況2—今年の農業報告

「天に唾する」とはこのことかもしれませんが、まず今年の天候について一言云いたい。5月頃暑い日があったかと思うと、9月中頃まで梅雨だったような気がします。東日本の太平洋側は暑かったようですが、九州北部の当地糸島は、9月24日の18号台風まで、すっかりした天気にはなりませんでした。

〈蕎麦〉9月4日に蒔いた蕎麦も、去年のように白い可憐な蕎麦の花が一面に咲く、というようなことにはならず、雨の応援を得て、雑草が生いのさばってしまいました。今年は「出来」もよくないし、草の間の蕎麦を刈るのはめんどろうそうです。しかし蕎麦は強い植物です。3日目には芽を出し、10日目には双葉の次の葉が出て、30日目には白い花が咲いている。

11月末から12月10日頃までに刈る予定です。おいしい蕎麦を食べたい方はお手伝いおねがいします。

〈サツマイモ・サトイモ・クロマメ〉5月30日と6月6日に、サツマイモを1000本植えた。「秋のイモ煮会のためのイモ植え会」でサトイモを植えたのは4月17日だった。サツマイモは上出来だが（掘ってみた）、サトイモは草に負けてしまったので（草取りがおくれた）近所の畑と比べると格好がつかない。クロマメは土地が

肥えすぎていたのか、柄ばかり大きくなり、葉も大繁茂しているが、丹波黒大豆の豆がなかなかふくらまない。

いずれにしても、10月22日にはバーベキューをやりたいたって人々が集まって来るので、サツマイモもサトイモも、黒豆の枝豆も食べてみることになる。たくさん残っていますので、御希望の方はどうぞ。

(糸乗 貞喜)

### 近頃の運動会の風景

～パラソルの花が一面に咲き乱れる～

昨年は所用で見学にいけなかったのであるが、去る10月3日の日曜日、小学校の息子の運動会に2年ぶり見学に行った。私は息子の最初の出番に合わせて午前10時過ぎ頃出かけたのであるが、運動場の周囲を取り巻く風景を見て驚いてしまった。3年前まではパラパラと見かけられたのが、今年はなんと運動場の片側一面

にアウトドア用のポータブルテーブル（4人掛け）と、これに取り付けられるパラソルが所狭しといった感じで開かれていた。ポータブルテーブルを持ってくる人の気持ちになって考えてみると、これはなかなか優れたものなのである。まず①狭いテントに入らなくて良い、②朝早くからテントの中の良い席を求めて早起きしなくても良い、③親父さんは自分の子供の出番が来るまでビールを飲みながら足を伸ばせてくつろげる、④昼の弁当の時には、家族3人から4人でイス式で食べられるなどであるが、実際に使っている人から聞くと、もっといろいろな理由が聞けそうである。

このポータブルテーブルは、1万円弱と比較的安価であることから別にアウトドアをやらない人でも手に入れやすく、この運動会の日のパラソルの花畑風景は、これからは当たり前前の風景となっていくことであろう。

(山田 龍雄)



### 「建物のリサイクル」

学芸出版社  
青木 茂著

元々私は、戦前の古い洋館や町家を現代的に改装し、新しい機能を持つ建物として活用することに興味があったので、この本は気になっていた1冊である。

著者が建物のリサイクルについてヒントを得たのは、ヨーロッパで繰り広げられている数々の歴史的建造物再利用の事例からである。その中には駅舎や城、工場を美術館として改装したものが挙げられている。

この本はそういった歴史的建造物のリサイクルも取りあげられているが、メインとなるのは時代の流れの中で使われなくなった建物、手狭になった建物のリサイクルである。

その中には既存の建物の一側面の壁を取り払い、隣にスペースを空けて新規に建物を建て、両建物の間をガラスで覆われたアトリウムにするなどの例が挙げられている。

建築の解体は全国どこでもよく見られる光景である。産業廃棄物の約20%は建築廃材だそうだ。家庭ゴミの

リサイクルはよく耳にするが、建物のリサイクルによるゴミ軽減も相当なものではないか。

環境について関心が寄せられ、長引く不況に苦しんでいる今の日本だからこそ「建物のリサイクル」について真剣に考えなければならないと思う。

(小田 好一)

### 編集後記

大学を取り巻く状況が大きく変化しています。学生減少、学力低下、エージェンシー化、さらに就業人口が減少するというなか、大学も地域にこだわった役割を積極的に提言していく必要があると思います。(べ)

よかネット NO.42 1999. 11

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

名古屋事務所 TEL 052-265-2401

東京事務所 TEL 03-3226-9130